

# 日本禪宗史の研究

—越後における中世禪宗教団の展開—

竹内道雄

## はしがき

本稿は、筆者が日本禪宗史の研究の傍ら、昭和五十一年四月から六十一年三月まで新潟県史中世史部会の調査・執筆員として標題、特にその副題について調査・研究した成果を纏めたものである。因みにここでいう越後とは、佐渡を含めた現在の新潟県を指す。

所載の拙文は、県史の性格や紙数の都合から、調査・研究した成果の内容を圧縮したり、一部を省略して記述せざるをえなかつた。ことにその際、年月を要して調査・研究した結果をもとに作成した各時代の開創・改宗禪寺院の明細一覧表は、全て割愛を余儀なくされた。

本稿は、県史に記載できなかつたこれらの資料を含めて、より詳細に標題について論述しようとするものである。これまで筆者は、標題に類するテーマで各誌に論考を発表して<sup>(注1)</sup>きた。本稿はこれらの各論文と一連のものである。従つて論述の過程において、それらと重複する箇所の存することは止むをえないことであり、読者のご寛恕を請いたい。

また本稿の記述に当つて、『新潟県神社寺院仏堂明細帳』

日本禅宗史の研究（竹内）

（明治十六年、新潟県史編さん室所蔵）『全国寺院名鑑－新潟県－』（昭和四十五年八月、全日本仏教会・寺院名鑑刊行会）『新潟県寺院名鑑』（昭和五十八年十一月八日、新潟県寺院名鑑刊行会）『延享年度曹洞宗寺院本末牒』（江戸・明治時代作、大本山總持寺藏版）および『曹洞宗新潟県寺院歴住世代名鑑』（平成元年十一月、新潟県曹洞宗青年会）等を参照、活用し、予め主要寺院の寺伝等を把握して実地踏査を行い、発見された史料で確認、補足しつつ叙述に努めた。しかし収集した史料の検討、紹介は、本文中では全て割愛した。

なお本稿の標題を、日本禅宗史の流れの上に把握する意味で、学術的には周知のことにつき属するが、序章を設けて概

説することとした。また本稿の内容は、鎌倉・南北・室町時代が中心となつたが、外の時代についての発表は別の機会に譲りたい。

（注1）「越後における曹洞宗教団の展開について」—元亀三年以前創立の小本寺を中心として—』『新潟県史研究』第7号（昭和五十五年一月、新潟県）、「越後における曹洞宗教団の展開について—中世草創記の概観—』『宗学研究』第十四号（昭和五十七年三月、駒沢大学）、「中世越後の禅宗教団の展開について」『宗学研究』第二十九号（昭和六十二年三月、駒沢大学）、「地方禅宗史の研究—越後・妻有地方を中心として—」『禅研究所紀要』第十七号（平成元年三月、愛知学院大学禅研究所）

## 目 次

はしがき

### 序 章 日本禪の源流

第一節 臨濟禪と曹洞禪の伝来

第二節 臨濟宗の伝播

### 第一章 越後への臨濟禪の扶植

第一節 無闇普門と華報寺

第二節 大覺派（建長寺派）の扶植と盛衰

第三節 仏光派（円覚寺派）の扶植と発展

### 第二章 越後の曹洞宗教団の展開

—南北朝・室町時代—

第一節 曹洞宗教団展開の概観

第二節 越後の曹洞禪の扶植

第三節 太源派の形成と発展

第四節 通幻派の進出と展開

序 章 日本禪の源流  
第一節 臨濟禪と曹洞禪の伝来

菩提達磨によって大成された禪宗が中國から日本に伝來し、その源流が形成されたのは、鎌倉時代の初期である。

比叡山の覺阿（一一四三—八二）が臨濟禪の楊岐宗を伝えたあと、明菴栄西（一一四一—一二五）が建久二年（一一九一）第二回目の入宋修行を終って帰国し、同じく臨濟禪の黃龍宗を伝え、九州・京都・鎌倉に布教し、幕府の外護を得て、鎌倉に寿福寺を開き、京都に建仁寺を創め、日本臨濟禪の源流を形成した。師は本来、師虛菴懷敞の流れを汲む純粹禪を発揚することを意図したが、天台宗徒の迫害の激化をさけて、現実的には圓・密・禪・戒の四種相承の兼修禪の立場をとった。

栄西は識見・才幹・智略に富み、源頼朝・頼家・実朝、北条政子など源家三代の帰依を受け、新興の武士階層に対する禪の布教の基盤をも固めた。師はまたこれまでの禪者の態度をなげすてて、禪の門戸を広く開放し、二十九人に

及ぶ多くの弟子を養成し、建仁寺教団を形成した。

この建仁寺教団の会下で栄西の禪風を受けて禪に開眼し、入宋求法して天童如淨の印可を受け、嘉祿三年（一二二七）帰国し、曹洞禪を伝えたのは永平道元（一二〇〇一一二五三）であった。道元は帰国の後、間もなく、建仁寺において「普勸坐禪儀」を撰述して自己の立場を宣言したが、天福元年（一二三三）の春に山城国（京都府）深草に興聖寺を建立して、日本において始めて純粹禪を実践し、その後、寛元元年（一二四三）越前国（福井県）の山奥に入山し、ここに永平寺を創設して日本曹洞禪の源流を形成した。

## 第二節 臨濟宗の伝播

福寺に迎えられ、建長七年（一二五五）開堂の儀をあげ、ここを本拠に各宗包容の兼修禪を宣揚した。その門流は師無関普門（南禪寺開山、越後華報寺中興開山）を生み、虎關師鍊、無住一円等の名僧を輩出し、東福寺を中心に隆々たる発展をとげ、南北朝・室町時代に五山・十刹・諸山の官寺機構が形成されると聖一派の官寺は全体の四分の一、七十余か寺に及んだ。

次に心地の兼修禪は、真言系の密教禪で、閩南第一禪林と称された紀伊国（和歌山県）由良西方寺（後の興國寺）を中心には布及し、後醍醐天皇から賜った國師号から法燈派と呼ばれ、南朝と曹洞宗に深いかかわりを持ち、また尺八虛無僧の普化宗として発展した。

臨濟宗は聖一派、法燈派の兼修禪と共に、中国の禪僧が直接もたらした純粹禪が伝播した。そのうち寛元四年（一二四六）蘭溪道隆（一二二三一七八）が伝えた大覺派は、

建長寺を中心にして聖一派につぐ門派を形成し、鎌倉時代を通じて関東禪林の主流をなした。蘭溪について、北条時寺・承天寺の開山となり、その後、藤原道家が造立した東

(一一一六一八六)は、蒙古襲来に出陣する鎌倉武士の身心の鍊磨に努め、のち円覚寺開山として迎えられ、彼我の

將兵を弔うと共に純粹禪發揚の最高峰をきずいた。無学の門流は、その禪師号から仏光派と呼ばれ、法孫に夢窓疎石(天龍寺開山)を輩出し、その後室町時代禪林の主流となつた。これよりさき文應元年(一一六〇)来朝した兀庵普寧(一一九七一一七六)は北条時頼の帰依を受けて大悟させた。時頼が日本の武士として初めて印可を与えられた点は注目に値する。

次に蒙古襲来後の外交使節として正安元年(一一九九)來朝した一山一寧(一一四七一一三一七)は北条貞時や龜山・後宇多兩上皇の帰依を受け、そのため中國の純粹禪は武士階層だけではなくて皇室や公家階層に浸透するようになった。一山の門流には、越後出身の雪村友梅(一一九〇一一三四六)や越後にも旅した万里集九等が輩出して、次代の五山禪林界隆盛の先駆となつた。

ついで嘉曆元年(一一二六)に清拙正澄(一一七四一一三三九)が、元徳元年(一一三一九)に明極楚俊(一一六一一三三六)、竺仙梵僊(一一九二一一三四八)がそれぞ

れ來朝して、日本の公武の間に尊信され、五山文学隆盛の基をきずいた。

ところで南北朝・室町時代の臨濟宗の歴史の中で注目すべきは、諸国の民心の慰撫と治安の維持を目的に、室町幕府によつて延元三年(北朝・暦応元年、一三三八)ころから北朝貞和年間(一三四五—九)にかけて、全国六十六国二島に安國寺・利生塔が設置されたことである。

また興国二年(北朝・暦応四年、一三四一)ころから五山・十刹・諸山の制度(以下五山制度)の官寺機構が整備され、足利義満の至徳三年(一三八六)に、天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・万寿寺の京都五山、建長寺・円覚寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺の鎌倉五山とその上に南禪寺(開山無闇普門)をおく五山制度が確立した。

かくてこのような五山制度を背景にして、五山諸派の禪僧は五山文学をも生み、夢窓疏石(一一七五一一三五)、春屋妙葩(一一一一八八)、中巖円月(一三〇〇一七五)、義堂周信(一三二五一一八八)、絶海中津(一三三六一一四五)などの巨匠が輩出し、その活躍は百花揺乱の華麗さを呈した。なお越後における十刹・諸山は、左表のよう

日本禪宗史の研究（竹内）

あるが、詳細は不明である。

寺格	寺院名	開山(派)	開基	現在所等
十刹	米山寺	義堂周信(夢窓)		中頸城郡姉崎町 (現新義真言宗)
"	至徳寺			上越市至徳寺 (現在廃寺)
諸山	普済寺	大田子興(聖一)		北蒲原郡笛神村出湯 (現曹洞宗)
"	華報寺	無闇普門(聖二)		

以上のようにして日本臨済禪は、まず鎌倉時代において、中國に渡った日本僧によって将来されて弘められた兼修禪と、中國の來朝僧によつて伝来された純粹禪によつて形成され、それはやがて南北朝・室町時代において、京都・鎌倉の五山を中心にして相互に交流し、禪文化の黄金時代を現出したのである。

ところで京都・鎌倉を中心に五山派の臨済禪が隆盛を極めていた頃、地方に展開していた臨済宗の一派に、大應派と幻住派があつた。

大應派とは大應國師南浦紹明の一派であり、その法嗣大燈國師宗峰妙超及び関山慧玄の三代は應燈閥と呼ばれ、この一流のみが今日まで達磨以来の臨済禪の法燈の命脈を維

持しているとされるのである。

その派祖南浦紹明（一二三五—一三〇八）は、円爾弁円の甥にあたり、建長寺に蘭溪道隆に参じ、正元元年（一二五九）入宋して虚堂智愚の法を嗣ぎ、在宋八年にして帰国し、筑前国（福岡県）早良興徳寺、太宰府崇福寺に住すること三十三年、法嗣・門弟百余人を育成した。この間、文永十年（一二七三）元使趙良弼を接待したが、高峰顕日と共に東西の二甘露門と称された。のち龜山・後宇多両上皇、北条貞時の帰依を受け、京都万寿寺・建長寺にも住し、中国の來朝僧によつて伝来された純粹禪によつて形成された。

ついで宗峰妙超（一二八二—一三三七）は、京都万寿寺に南浦の室に入り、印可を得、悟後二十年の修行を続け、正和四年（一二一五）ごろ洛北紫野に庵居し大徳寺の基をきずき、諸宗、皇室の尊信を受けたが、名利に超然として五山の勅許も辞し、厳烈無雜の臨済禪本来の面目を堅持した。大徳寺は宗峰の法嗣徹翁義亨が第一世となつたが、その後、一休宗純（一二九四—一四八一）が出て活況を呈し、宗峰の禪風を維持し、臨済宗地方発展の源泉となつた。宗峰の法嗣関山慧玄（一二七七—一三六〇）は、師の印

可を受けてから美濃国（岐阜県）揖深の里に隠栖し、悟後の修行に励んだが、宗峰の推挙により、花園上皇の離宮を改めて禪苑とした妙心寺の開山となり寺基を確立した。その後、応永の乱（一三九九）によつて一時荒廃したが、尾張国（愛知県）犬山瑞泉寺の日峰宗舜（一三六八—一四四八）によつて伽藍は復旧された。だが応仁・文明の大乱（一四六七—七七）によつて伽藍は再び鳥有に帰した。

そこで龍安寺開山義天玄承（一三九二—一四六二）の法嗣雪江宗深（一四〇八—八六）が発願して伽藍を復興すると共に、塔頭の庵主が交互に本寺に住する妙心寺教団の輪住制度が定められ、美濃を拠点にして甲斐（山梨）・駿河（静岡）・尾張（愛知）・伊勢（三重）・大和（奈良）・丹波（兵庫）などの各地において細川・武田・今川・織田などの戦国大名を外護者とし、民間信仰をも摄取しつつ隆々たる発展をとげ、臨済宗寺院総数五、七八四か寺の半数以上三、四二三か寺を占めるに至った。

臨済宗の地方発展は大応派の妙心寺教団が主流であるが、その一翼を担つたのが幻住派である。幻住派は、南嶽懷讓下二十一世の法孫・幻住庵中峰明本（一二六三—一三二

三）を始祖とする一派で鎌倉・南北朝時代に中峰の隠逸的禅風を継承して、陸奥（青森）・常陸（茨城）・甲斐・丹波などの地方で民衆の教化にあたつた。その後、室町・戦国時代に丹波高源寺に一華硯由（一四四七—一五〇七）が出て、多師印証等の接化方法によつて禅宗諸派の交流をはかり、ために禅林諸門派の対立が緩和され、大門派禪宗教団の形成に貢献したのである。

以上が中世における臨済宗伝播の大勢であるが、この趨勢を背景に、越後においては、臨済禪はどのように扶植したであろうか。

## 第一章 越後への臨済禪の扶植

### 第一節 無闇普門と華報寺

越後における臨済禪の最初の扶植は、嘉禎元年（一二三五）頃以後、建長三年（一二五一）以前の間までに、東福寺聖一派の無闇普門（一二二二—九一）によって北蒲原郡笛神村大字出湯の五頭山華報寺に印せられた。

無闇は信州（長野県）の人で姓は源氏。七歳のころ越後

に到り、正円寺の僧で伯父である寂円の侍童となつた。十三歳のとき髪をそつて聖教を学んだが、性格が粗暴だったため、寂円は師の将来を慮つたのであろう。信州の塩田の館に居を移し、そこで法筵を施いた。信州の学者は多くここに集まつたが、無闇もその席に侍り勉学に精励した。数年後、寂円は師の学問が長じたのを認め、受業師として得度を許した。

無闇は寛喜二年（一二三〇）十九歳の時、上野国（群馬県）の長樂寺に釈円栄朝に参じて菩薩戒を受け、また顯密両教を極め、関東越北の構席において、「其の鋒に嬰れる者なし」とされた。その後、東福寺の聖一国師円爾弁円がさかんに化を京都にふるつてることを聞き、すぐさま上京してその会下に参じた。円爾は一見してすぐれた人物であることを知つたが、無闇は円爾の会下で修行すること五か年、ついに円爾の「玄旨」に「冥契」することを得たのである。

こうして無闇は、円爾の兼修禪の地方布教を志したのであろう。東福寺を辞して越後に帰還し初めて剃髪した正円寺に入ったと思われる。無闇の帰還を知つた華報寺の住持

本智は、無闇に相見してその人格に帰服し「欣然として席を譲る」ことを約したのである。

華報寺は五頭山麓にあり、天平年間（七二九—四九）、僧行基が東国来遊の際、ここに止錫し、優婆尊像を彫刻して庵におさめ人びとの治病平癒を祈つたのが寺基の始めと伝えられる。

その後、大同年間（八〇六—九）、五頭山が開かれ五峰山頂に五尊が安置され、山麓には堂宇が建てられて、海満寺と称する真言宗の寺院となし、三十数坊の伽藍ができたという。

このように華報寺は、古代以来、真言の密教寺院、修驗信仰の道場としてこの地方の宗教文化の中心となつていた。しかし古代末、中世初期の兵乱によって衰微していたので、住持の本智は、新時代の宗教界のホープである禪僧の無闇に華報寺の復興を托したのであろう。

かくて無闇は「教を革めて禪と為したので」、華報寺は、「頗る叢林と成り、屢々春秋を換へ」たというから、華報寺は真言宗から臨済宗に改宗され、数年の間、無闇を中心にして禪林が形成された。

その後、建長三年（一二五ー）、無闇は慨然として入宋

求法し、靈隱寺に班荊叟に、淨慈寺に断橋妙倫に謁して参  
禪弁道に励み、とくに断橋からは臨終に侍して法衣並びに  
自贊の頂相を付与された。そのうち無闇は、両浙の叢林を  
徧参し、在宋十二年の修行の後、弘長二年（一二六二）帰  
国し、薩摩州（鹿児島県）を回って九州に二年留り、のち  
入京して東福寺の円爾に侍し、また関東に往って寿福寺に  
入り、共に後住を請われたが、いずれも固辞して受けず、  
再び越後に帰り華報寺に入ったのである。

弘安四年（一二八一）、前年に円爾が寂したので、無闇  
は一条実経の請によって東福寺に住したが、のち正応四年  
(一二九一) 龜山上皇の請により南禅寺の開山となり、こ  
の年十二月十二日寂した（大日本國皇城東五山之上瑞龍山大  
平興國南禪々寺開山第一世祖仏心禪師大明國師無闇大和尚塔銘」

『続羣書類從第九輯上伝部』三二九—三二頁)。

無闇は、円爾が病を得て療養に入った弘安三年（一二八  
〇）二月以後、越後を離れて上京しているので、無闇の華  
報寺在住は、在宋十二年の不在期間を除いても嘉禎元年  
(一一三五)頃以後、弘安三年（一二八〇）まで前後三十

年間にわたったと思われる。

しかし華報寺は無闇のあと禪の法燈を繼ぐものが多く、  
その後天台宗をもつて靈蹟が維持されたとされるが、永仁、  
延慶年間（一二九三—一三一〇）の鎌倉時代末期には、時  
宗系信徒の靈場にもなったと思われる。その後、南北朝・  
室町時代は衰微の一途をたどったが、文明九年（一四七七）、  
村上耕雲寺六世太菴梵守（一四〇七—八二）によつて復興  
され、曹洞宗に改宗されて現在に至つている。

## 第二節 大覺派（建長寺派）の扶植と盛衰

聖一派に次いで、蘭溪道隆の大覺派が、三島郡出雲崎町  
大門の正応寺と南蒲原郡栄町大字小滝の東山寺に扶植され  
たと伝えられている。

前者の正応寺の寺伝は次のようである。

正応寺は常在山実相院または靈鷲峰雙樹林と号し、貞觀  
年中（八五九—七六）藤原冬嗣の建立で、慈覺大師円仁  
の開創、本尊釈迦牟尼仏は円仁の一刀三札の作と伝えられ  
る。その後、寺院は荒廃していたが、建久年間（一一九〇  
—九八）、佐藤継信・忠信兄弟の母妙照尼が境内の小庵に

住んでそこで没し、そのあと佐藤兄弟の父基治の部下がこの地方を支配することになり、その外護で寺基はやや盛運に向つた。

そして寛元四年（一二四六）、蘭渓道隆が来山し、寺院を再興して禅寺と改め、『紹応禪林後鑑記』を作つた。執権北条時頼は蘭渓外護の大檀越となつて七堂伽藍を建立し、また將軍宗尊親王から三千貫を賜つた。

次に後者の東山寺の寺伝は左のようである。

東山寺は、平安時代に真言宗として開創され、池頼盛の菩提寺であったと推定される。鎌倉時代になり、宝治二年（一二四八）、蘭渓道隆がこの越後大面郷に至つて禅寺を建立し、黄檗山東山寺となし、その後、正応寺とならんと北越における二大禪林となつた。

このように寺伝によれば、正応寺と東山寺に、蘭渓道隆の純粹禪が、寛元四年から宝治二年にかけて扶植されたとされるのである。しかし蘭渓は来朝した寛元四年には博多の円覚寺に入寺しており、翌宝治元年（一二四七）に京都に上り、泉涌寺の明觀を訪い、紫野の雲林院に寓居している（一説泉涌寺来迎院）。おそらくこの年、蘭渓は明觀の

勧めで鎌倉に赴き寿福寺に止錫した。北条時頼はこれを聞いて粟船の常楽寺を寄進したので、蘭渓は宝治二年十二月、常楽寺の住持となつたのである。

こうした蘭渓の行実を考えると正応寺、東山寺への臨濟禪扶植の年次には疑問が残る。蘭渓は時頼に優遇されて建長五年（一二五三）建長寺の開山に迎えられ、また文永二年（一二六五）京都の建仁寺の住持となつたが、文永九年（一二七二）のころより、蒙古の襲来を背景に、叡山僧都の迫害が加わり、甲斐国（山梨県）や陸前国（宮城県）の松島等に踪跡を晦まそととしているから、このころ越後に入つたことは考えられる。

いざれにしても建長寺を中心とした蘭渓の大覺派は鎌倉時代を通じて関東禪林の主流をなしていったからその扶植が越後に及んだとて不思議はない。

しかし南北朝時代以後は、大覺派の宗勢の停滞と併行するかのように正応寺、東山寺両寺ともに衰微した。ことに正応寺は、室町時代に入り、文安四年（一四五七）秋、火災によつて堂塔悉く焼失し、十五世紀末ころまで荒廃にまかせられた。

しかし戦国時代、十六世紀中葉になると新しい武士階層の外護を得ることによつて漸く復興されるに至つた。

すなわち東山寺は、天文三年（一五三四）、上杉為景の家臣大面（小滝）城主丸田伊豆守によつて伽藍が再建され、上野国（群馬県）利根郡月夜町下牧の曹洞宗玉泉寺五世宣州元助が招請されて中興された。宣州は通幻派相模国（神奈川県）最乗寺了庵慧明の流れを汲む法系の祖師一州正伊——曇英慧応——大潮浮船——透津玄俊の四世までを勧請し、自らは五世を称した。かくて東山寺は山号を曹渓山と改め曹洞宗に改宗され、以後、上杉氏および溝口新発田歴代藩主の帰依を受けて、末寺七か寺を持つ小本寺として発展をとげた。

また正応寺は、永正元年（一五〇四）以前に曹洞宗の通幻派石屋真染の流れを汲む寿山篤彭（一一五〇四）によつて改宗されたが、上杉謙信の執事直江兼続の帰依を受け、永禄十年（一五六七）、寺領五十石を寄進されるようになり復興するに至つた。その後、堀秀政の時代に寺領は没収され、長岡藩主牧野氏の与板城入城後は牧野氏の菩提寺となつた徳昌寺（三島郡与板町与板）の末寺となつて現在に至つている。

以上、臨済禅の越後への扶植は、まず十三世紀中葉ごろに、聖一派（東福寺派）、大覚派（建長寺派）によつて、華報寺、正応寺、東山寺に印せられたが、いずれも平安仏教を改宗して行われ、同時にその後、曹洞宗に改宗するというケースをたどつた。

これらに対しても臨済宗寺院そのものの最初の開創は北蒲原郡中条町東本町の平田山大輪寺である。大輪寺は、南北朝時代の正平元年（北朝貞和二年——三四六）、中条茂資が堂宇を建立し、円爾弁円の四世（無闇普門の三世）の法孫平田慈均（一一三六四、東福寺二四世、南禪寺二十五世）を開山に招請して開創された。

ところで既述のように、このころ足利政権は安國寺・利生塔設置等の宗教政策を推進していたが、この政策を受け、大輪寺は、足利尊氏を勧請開基として、足利氏の祈願所であり、室町幕府の祈禱寺であつたと思われる。

その後、戦国時代の永正六年（一五〇九）、中条氏の十四代藤資は、公寺としての大輪寺を解体して、寺基を城外の石原館に移し、臨済宗を曹洞宗に改宗して山号も淨並山と改め、通幻派の天真自性の流れを汲む五泉市錦町の興泉

寺三世委岳洞察（一一五四一）を迎えて中興開山とし、中条氏の菩提寺としたのである。

それより大輪寺は近世、近・現代に至るまで伽藍法も実峰派、明峰派に移るなど複雑な歴史をたどって、末寺三か寺を持つ小本寺となつてゐる。

以上、華報寺、正應寺、東山寺、大輪寺の臨濟禪はいざれも後に曹洞宗に改宗された点に共通の性格がある。そしてその諸寺院が臨濟宗として改宗または創立されたのは鎌倉時代の中葉から南北朝時代の初期であつた。

### 第三節 仏光派（円覚寺派）の扶植と発展

ところで室町時代に入ると、既述のように無学祖元の仏光派（円覚寺派）が禪林の主流をなすに至つた。

この禪林の形勢を背景に臨濟禪の仏光派が越後に扶植され、十五世紀を通じて、越後臨濟禪の隆盛期を現出した。

それはまず、応永十七年（一四一〇）、南魚沼郡関山村上山（現塩沢町大字上野）における覺翁祖伝による閑興庵の創建である。

覺翁は上杉憲顕の子といわれ、諸国遍参の末、上山の地

に草庵を結んで居つたが、応永十一年（一四〇四）の春、上野国（群馬県）那波郡柴宿村万松山泉龍寺開山白崖宝生（一三四三一一四一四・普覺円光禪師）が越後のむかしからの信者の招きによつて来越し、ここに上田庄田中の大義寺において九十日間の江湖会が行われた。この時、覺翁も参会し、始めて白崖に相見し、受戒、得法した。

かくて覺翁は応永十七年三月十五日、白崖を勧請して開山始祖と仰ぎ、自らはその次位にあつて第一世を称し、ここに最上山閑興庵が臨濟宗寺院として開創された。その後、覺翁は、応永二十年（一四一三）には七堂伽藍を建立するに至つた（「万松山泉龍寺普覺円光禪師伝」『続羣書類從第九輯下伝部』六八二一五頁）。

次いで覺翁のあとを継いだ第二世不藏青丹は応永二十三年（一四一六）より住職となつたが、永享八年（一四三六）、長尾房景の推挙で、足利持氏より寺領百二十貫文および境内山林を寄付された、という。また第三世在天の時、房景の帰依により、堂宇も整備され、以後、代々長尾氏の外護を得て隆々たる発展をとげ、ついに、越後・越中・能登・佐渡・信濃の五か国にわたり、末寺約三〇〇か寺を有する

北陸信越地方の臨済宗の総本寺になつたといわれる。

その後、戦国時代に入り、永正四年（一五〇七）より起つた永正の乱、広居橋の戦いの兵火により、永正九年（一五一二）諸堂焼失したが、翌年長尾房長の助力によつて諸堂が建立し、上野国那波郡来福寺の住持一華を招請して再興された。しかし天正六年（一五七八）、上杉謙信卒去後の景勝、景虎二嗣子の家督争いである御館の乱が起り、その余波を受け、兵火によつて一山焼土と化した。だが乱の鎮定後、上杉景勝の外護により、天正十一年（一五八三）には、是鑑和尚の所望が認められ、朱印状が与えられ、安国寺内の一花院として諸役が免ぜられ、十四年（一五八六）には諸堂が再建された。しかしその後も文禄三年（一五九四）、失火で三たび伽藍が焼失し、仮堂を建てるにとどめられた。

慶長三年（一五九八）、上杉景勝の会津移封と共に第三十二世東岩もこれに従い、会津から、その後米沢に移り、ここに米沢関興庵を建立した。そのうち江戸時代の寛永八年（一六三一）、米沢関興庵の僧万源を迎へ、現在地に越後関興庵を復興し、その後、第四十二世匡山によつて寺域

や伽藍が整備され、寛延四年（一七五一）、庵名を改めて関興寺とするに至つた。そのあと白隱慧鶴と道交の深かつた大隨明玄、施溪覚抽らによつて関興寺の臨済の禪風は大いに振るい、「関興寺の味噌舐めたか」の俚言が生れるようになつた。

ところで現在の越後における臨済宗寺院は、円覺寺派が関興寺以下九か寺、妙心寺派が三か寺、計十二か寺しか存在していない。このうち円覺寺派は関興寺を小本寺とする以下六か寺、宝珠庵を本寺とする以下二か寺、その他一か寺となつている。

宝珠庵は、南魚沼郡湯沢町神立にあり、旧名泉福寺といつてある。関興寺勧請開山白崖宝生が既述のように応永十一年（一四〇四）に来越して、上田庄田中の大義寺に留錫し、臨済禪を提唱した時、別に寺地を開いて一寺を開創し泉福寺と名づけたことに始まる。その後、永祿年中（一五五八—七〇）、直江兼続の父樋口元兼が菩提寺として再建し、七堂伽藍が整備された。天正六年（一五七八）御館の乱の余波で一時衰退したが、第十四世崇山正善が中興し、寺名も宝珠庵と改め現在に至つてゐる。宝珠庵はその成立

[表 1] 越後国臨済宗寺院概勢一覽

大儀寺	正輪寺	觀音寺	安泰寺	護國山	法林山
慶長	五				
一六〇〇					
清庵宗徹	石室和尚				
内藤信成	村上藩主				
妙心寺	妙心寺	妙心寺	円覺寺		
妙心寺			華藏寺		
村上市村上			南魚沼郡塙沢町関山	上越市南本町	新発田市早道場
る			華藏寺(福井県)の隠居寺		
			亨保五(一七三〇)村上に移		

の事情からいうと関興寺の本寺格にあたり、その創立も関興寺の開創に先立つ応永十一年（一四〇四）の秋八月以前であったと思われる。

次に妙心寺派は、円覚寺派が南魚沼郡塩沢町に集中しているのに対し、上越市の正輪寺、新発田市の観音寺、村上市の安泰寺と各地に散在しており、その歴史は殆ど不明である。

以上が越後における臨済禪扶植の大勢であるが、これらを一覧表にすると「表1」のようである。

日本曹洞宗が教団として展開する素地は宗祖道元の大乗菩薩道（衆生済度を第一義とする仏道）の思想にある。その思想が行動と共に具体的に発揚されたのが、道元が入宋し大悟して帰国した後、天福元年（一二三三）春開創された観音導利興聖宝林寺（以下興聖寺）の僧団の形成および坐禪・説法・著作を通じての僧俗への教化運動であった。後世の日本曹洞宗（以下曹洞宗）教団発展の源泉は、この興聖寺僧団の形成と興聖寺の約十年間に及ぶ道元の思想と行動にあつたと言つてよい。

〔空欄は不明または未調査、以下同〕

## 第二章 越後の曹洞宗教団の展開

南北朝・室町時代

## 第一節 曹洞宗教団展開の概観

その後の寛元元年（一二四三）から建長五年（一二五三）までの十年間の永平寺僧團における道元の生活は、只管打坐を主軸とする自己研修と弟子の養成が中心となつたが、鎌倉行化や在俗者の布薩説戒会の実施が示すように、道元の衆生済度、在俗教化の念は失われることがなかつた。

日本禪宗史の研究（竹内）

しかし道元滅後は、道元の宗教の展開と永平寺の改革をめぐって弟子の間に紛争が生じた。これが文永四年（一二六七）から文保元年（一三一七）の前後半世紀にわたって起こつたといわゆる三代相論である。

その結果、曹洞宗原始教団は崩壊したが、道元の宗教の時代的展開を志す徹通義介によって加賀に大乗寺僧団が成立し、また寒巖義尹によつて肥後に大慈寺が開創され、その後その法流が応永年間東海道に入り、遠江に普濟寺を開き寒巖派十三門派教団の基をきずいた。

さて義介の志を継いだ法嗣の瑩山紹瑾は、道元の宗教の民衆化運動を推進し、さらに能登に永光寺・淨住寺等を開創し、大乘寺と連携づける教団を組織した。かくて曹洞宗教団史の主流は、道元禪の民衆化の方向に瑩山紹瑾の法流によつて展開していった。

その後、瑩山は、元亨三年（一三二三）、永光寺の奥の山頭に伝燈院開山堂即ち五老峰を建設して新しい信仰対象とし、山内に四つの塔頭を作り、明峰素哲・峨山韶硯以下四人の法嗣が永光寺の住職を勤める曹洞宗教団最初の輪番制度を樹立した。

瑩山はまた能登の真言宗律院を改宗して元亨元年（一三二二）總持寺を開創したが、瑩山の寂後、峨山韶硯が總持寺の二祖となり、峨山の二十五哲といわれるすぐれた多くの弟子を養成し、また曹洞五位の思想を独自に確立して總持寺教団発展の基盤を固めるに至つた。

峨山の二十五哲のうち太源宗真・通幻寂靈・無端祖環・大徹宗令・実峰良秀の五人は峨山の五哲と称せられ、總持寺の山中にそれぞれ普蔵院・妙高庵・洞川庵・伝法庵・如意庵の五院を開創し、相協力して本山としての總持寺を護持しその教団の発展に努力した。

さて峨山は、康安二年（一三六二）二月及び貞治三年（一三六四）十二月、置文を示し、門弟に対して總持寺の将来につき守るべき三つのことを教誡し、師の瑩山に範をとり、輪住制度と合議制度を定めたのである。前者の輪住制度は、要するに前記の五院の住持が順次に回り持ちして總持寺の住持職を勤める制度であり、この制度と話し合いによって教団を運営する後者の合議制度が總持寺教団の大発展の原動力となつたとされている。

ところで曹洞宗教団がその民衆化運動において第一に着

〔表2〕 越後国普藏院輪番地

寺 院	開 山	創立・改宗年代		所 在 地
		日 本	西 暦	
耕雲寺	勸請 梅山聞本	応永	一三九四	村上市門前一四三
慈光寺	傑堂能勝	応永	一四〇三	中蒲原郡村松町蛭野八七〇
雲洞庵	一世 頭窓慶字	応永	一四二〇	南魚沼郡塙沢町雲洞六六〇
種月寺	南英謙宗	文安	一四四六	西蒲原郡岩室村石瀬三三五六
安養寺	南心祖陽	文安	一四五〇	中蒲原郡村松町五七九二
東福院	願成寺	宝徳	一四五四	刈羽郡刈羽村赤田北方二八八五
長禪寺	正法寺	享徳	一四五六	南蒲原郡下田村森町八四〇
福嚴寺	久海翁	文正	一四六六	新津市秋葉一十九一
吉祥寺	堅室宗玉	文亀	一四九三	五泉市川瀬五一八
大慈寺	骨外芳徹	明応	一五〇二	西蒲原郡吉田町鴻巣二二六
同妙高庵輪番地		慶長	一五〇四	柏崎市橋田戊八八三
同如意庵輪番地		享禄一以前	一五二八以前	新潟市赤塚二七一甲
長興寺	龍月窓	文明	一四五六	北蒲原郡安田町草木七四九
	伝芸	応仁	一四六八	柏崎市西本町三一四一三
	金	康正	一四八六	柏崎市原町三一二二
天室惠鏡	快翁	一一	一	
元和四		十八	二	
一六一八			一	
長岡市稽古町甲一六三六				

(竹内「越後における曹洞宗教団の展開について」『県史研究7号』所収)

手したのは寺院の開創・建立であった。右の五院の開基もその外の峨山の法嗣も地方に赴いて寺院を建立して教線の拡大に努めた。中でも峨山の上足（第一の弟子）無底良韶は陸奥に正法寺を開創し、後に「扶桑曹洞第三の本寺」と称される正法寺教団の基盤を形成した。また越後の生んだ傑僧源翁心昭は、岩城に示現寺、下野に泉溪寺、さらに伯耆に退休寺等を開創し、東北・関東・中国地方にわたりて縦横無尽の布教活動を行つた。そしてこれら峨山の二十五哲の開創寺院のほとんどは、その後加減整備されて総持寺直末三十六門となり、総持寺教団の中核となつたのである。また五院開基の五哲の寂後は、その直嗣者及びその法

流が輪番に本山總持寺に上山して住持職を勤めたが、彼等が開創した地方寺院を輪番地寺院といい、これらの寺院は後に全国において三三九か寺と定められた。さらに輪番地寺院を除いた五院開基の直嗣者が開創した寺院を庵末と称し、これも後に七〇か寺と定められた。

總持寺教団は、このような直末三十六門、輪番地寺院三九か寺、庵末寺院七〇か寺が教団の中核となつて隆々たる発展をとげるに至った（竹内『曹洞宗教團史』『總持寺の歴史』等）。

以上、道元より峨山の二十五哲の時代およそ十三世紀の後半から十五世紀の初めころまでの曹洞宗教団の展開の大勢を述べたが、越後における曹洞宗教団は、右のうちその主流である總持寺教団の発展の中において、その一翼として展開するのである。

囲みに越後においては、本来、總持寺の直末寺院はなく、輪番地寺院は、「表<sup>2</sup>」のように、普藏院輪番地一二か寺、妙高庵輪番地三か寺か如意庵輪番地一か寺である。但しこれら輪番地寺院が確定するのは天正十五年（一五八七）以後で、制度的には、明治三年（一八七〇）、總持寺

の輪住制が廃止され、独住制となるまで存続するのである（横関了胤『江戸洞門政要』、昭・一三・一〇、佛教社）。

## 第二節 越後への曹洞禪の扶植

さて曹洞禪の越後への扶植については、寺伝として、曹洞宗の開創または改宗が十三世紀の中葉以後または十四世紀の前葉としている寺院があるが、前述の曹洞宗史の上から言つていづれも妥当性を欠くといわねばならない。

### 源翁派の扶植

越後への曹洞禪は、前述した峨山韶碩の法嗣で越後出身の源翁心昭（源翁玄妙・玄翁源妙・玄翁玄妙・空外心昭・玄翁真照ともいう）〔一三三九—一四〇〇〕によつて最初に扶植された。それは正平八年（一三五三—北朝文和二）西蒲原郡弥彦村矢作一八二四の福聚山慈眼寺の建立である（「福聚山慈眼寺縁起」「弥彦村史略年表」）。

ところで県内における源翁心昭（以下源翁と略称）を開山または開基とする寺院は、「表<sup>3</sup>」のように八か寺に及んでいる。表によつて知られるように、源翁の足跡は、西蒲原・岩船・北蒲原三郡の下越地区とさらに佐渡に印せられ

てゐる。しかしその後、法系は殆ど中絶し、岩船郡関川村土沢の雲(温)泉寺および同寺二世天海空広(一三四三—一四一六)開創の新発田市上赤谷字陣場山の重福山龍泉(川)寺の二か寺が源翁の法灯を現在に伝えているのみで

ある。しかし源翁の活動範囲は、むしろ越後国外に広く、新潟県外における師の開山所は、既述のものも含めてまとめて見ると管見では「表4」のようである（「雲泉寺文書」、田浪龍之「中世越後における曹洞禪」『頸城文化三〇号』）。源翁

〔表3〕  
越後国源翁心昭の開山所

〔表4〕 越後国外源翁心昭の開山所

寺院名	山号	開創年代		現住所
		日本	西暦	
泉渓寺	五峯山	(正平文和三)	九	栃木県那須郡烏山町金井一一二
退休寺	金剛山	(延文二)	十二	鳥取県西伯郡中山町退休寺三一六
慶徳寺	卷尾山	(正平二十三)	一三五四	福島県喜多方市慶徳町豊岡今町二八八
安穩寺	結城山	(応安元)	一三五七	茨城県結城市鍛冶町一七二五
示現寺	護法山	(建徳四)	一三六八	福島県耶麻郡熱塩加納村熱塩
化生寺	玉雲山	(永和元)	一三七一	岡山県真庭郡勝山町勝山七四八
常在院	法石山	(天授元)	一三七五	福島県西白河郡表郷村中寺字屋敷二四
正法寺	伝燈山	(永和元)	一三九〇	山形県鶴岡市大字大山ぬ三〇八
最禪寺	大乗山	(嘉慶十四)	一三七八	秋田県湯沢市山田堂ヶ沢八一
永泉寺	剣龍山	(弘仁正平文和三)	八二三	山形県飽海郡遊佐町直世
最禪寺	大乗山	(元中十四)	八二七	

が越後の出身でありながら、その門流が県内外に栄え得なかつた理由については今後の解明すべき課題である。

#### 無外派の扶植

さてこの間に峨山の法孫で、無外円昭の法嗣無著妙融（一三三三—九三）が応安六年（一三七三）春、「越後に往つて春日山光徳寺を創し、衆を安ずるに一千指」に及んだというから、無著の門風が光徳寺を中心に十四世紀の末葉に一時挙揚されたことがわかる（「弘化系譜伝」「曹洞宗全書史伝上」）。

しかし無著は、翌七年、九州豊後（大分県）の大友氏の招請によつて越後を去つたのでその法流は絶えた。光徳寺は現在所在不明であるが、上越後府内と推定されている（田浪龍之「前掲論文」「頸城文化二九号」）。

### 大徹派の扶植

ついで峨山の五哲の一人、伝法庵開基、越中（富山県）立川寺開山大徹宗令（一三三三—一四〇八）は、元中三年（一三八六）直江津市長浜の地に悦翁寺を開創したが、天文年中（一五三二—五四）兵火のため焼失した。また大徹の法嗣、立川寺三世日光良旭は、応永六年（一三九九）、西頸城郡名立町平谷に昌禅寺を、同じく大徹の法嗣月桂立乗は、応永二十六年（一四一九）、同じ名立町の大町に名立寺を、同じく名立町丸田に善照寺をそれぞれ開創した。また月桂の法兄不藏可直は、糸魚川市大字羽生に耕文寺を建て開山となつた。

こうして十四世紀末葉から十五世紀の中葉頃までは、上越地区において、大徹派が最初に曹洞禪を扶植して教線を張った。しかしその後、大徹の法系は続かず、十五世紀末葉から十六世紀中葉にかけて大徹の法兄通幻寂靈の門流によつてそれぞれ中興されたのである。

### 月泉派の扶植と発展

さて一方、峨山の法孫で、岩手県水沢市黒石町の正法寺二世月泉良印（一三一九—一四〇〇）の法嗣無等良雄は、

十四世紀の中葉東北地方より北蒲原郡黒川村持倉に入り、明徳元年（一三九〇）八月、泰澄開基と伝えられる真言宗の古刹持倉寺を、曹洞宗正統寺と改宗し、本師月泉を請して開山となした。その後、同寺の七世桂室秀香（一一五三六）は、文明三年（一四七一）に福樂寺（北蒲原郡加治川村向中条）を、八世密山秀巖（一一五六五）は、永祿二年（一五五九）一一説永祿八年（一五六五）一に円福寺（北蒲原郡黒川村夏井）を、九世葉巖玄春（一一六一七）は、元和元年（一六一五）に龍沢院（北蒲原郡黒川村小長谷）を、また十五世心盈即伝（一一七二一）は、石仏庵をそれぞれ開創し、正統寺は後世末寺四か寺を持つ小本寺として榮え、中世末では本寺岩手県の正法寺の輪住地であった。しかし十七世大樹密岩（一一七五六）までは月泉派の法系が続いたが、以後十八世から二十四世までの江戸時代は明峯派が入寺し、明治以後住職の法系は通幻派に代つて現在に至つている。

寺院一覧表(1)

現在ノ派系	現在ノ本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑 堂	種月寺			西蒲原郡弥彦村矢作1824	寛永7(1630)年種月寺16世万巌秀悦(1621-80)により中興
源 翁	岩代示現寺		1	岩船郡関川村土沢2056	貞和元(1345)年真言宗知足庵として存立、法秀留録
				不 明	所在地上越後府内と推定(田浪龍之説)
太 初	瑞光寺	一	1	東蒲原郡三川村大字小石取	文明元(1469)年瑞光寺2世一溪瑞天により中興、正安元(1299)元天台宗
				不 明	文禄2(1593)年廃寺、慈眼寺と同一寺ならんか
傑 堂	佐渡本田寺	三	2	佐渡郡赤泊村大字徳和3406	大永2(1522)年本田寺麗天宗果により中興
了 庵	林泉寺	○	1	上越市長浜1360	慶長2(1597)年林泉寺日堂膺朔により中興
無 底	陸中正法寺	三	3	北蒲原郡黒川村持倉 540	真言宗の古刹牟礼山持倉寺を再興
普 済	佐渡剛安寺	二	2	両津市椿 340	永正年中(1504-20)剛安寺4世靠山永虎により中興
普 済	佐渡利濟庵			両津市北小浦 438	元和元(1615)年利濟庵8世繡屋良紋により中興

れた。しかしこれらの諸師による寺院の開創は、そのまま越後ににおけるそれぞれの門派発展の拠点にはなりえなかつた。なお十日町市四日町の神宮寺は、現在、江戸時代に中興された曹洞宗通幻派の寺院であるが、応安三年(一二三七〇)の時点では禪寺であつたことが、昭和四十七年、解体修理の際、発見された同寺の木造広目天王立像背板裏面墨書銘文で明らかになつたことは注目に値する(拙稿「越後国波多岐神宮寺広目天体内銘文の課題」『日本歴史』第三四七号—昭和五十二年四月—)。

南北朝・室町時代曹洞禪の大勢以上、越後へ扶植された曹洞禪諸派およびそれ以外の諸派も含めて、南北朝時代に開創または改宗

〔表5〕 越後・佐渡南北朝時代(1336~91)開創・改宗曹洞宗

開創年代		山号	寺号	釈迦以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
南朝 正平8 北朝 文和2	1353	福聚山	慈眼寺	薬師如来	源翁心昭 (1329—1400)	
南朝 正平13 北朝 延文3	1358	龍峯山	雲泉寺 (温)		源翁心昭	国上寺僧 法秀阿闍梨
南朝 文中2 北朝 応安6	1373	春日山	光徳寺		無著妙融 (1333—1393)	
南朝 天授5 北朝 康暦元	1379 一説1386	宝珠山	正壽寺	聖観音	曹洞の徒 関鶴	小田切彈正 満政
南朝 弘和元 北朝 永徳元	1381		化生寺		源翁心昭	
南朝 弘和元 北朝 永徳2	1382	白毫山	東光寺	聖観音	源翁心昭	本間山城守 源秀純
南朝 元中3 北朝 至徳3	1386		悦翁寺		中興 日堂膺朔	大徹宗令 中興堀秀治
南朝 元中7 北朝 明徳元	1390 他説①1345 ②1395	円通峰 万年山	正統寺	十一面觀音	勸請 月泉良印 (1319—1400)	無等良雄
南朝 元中7 北朝 明徳元	1390	吉住山	利濟庵		源翁心昭	妙義尼 (本間道正の後室)
南朝 元中8 北朝 明徳2	1391		西光寺		源翁心昭	

された曹洞宗寺院をまとめると、〔表5〕のように十か寺である。ところで曹洞禪の先進地帯は、その発祥地である越前・能登・越中の北陸地方であり、ついで東北・中国・近畿地方であつたといつてよく、越後の曹洞禪の展開は、他の分野の歴史的展開と同様にその後進性は否定することができない。

それはともあれ、南北朝の合がなつて室町時代となり、応永年間以後に入ると、曹洞宗の小本寺（末寺を一か寺以上有する中心寺院）の創立は全国的に俄かに増加していく。横関了胤の研究によると、南北朝時代六三か年の創立寺院数一五八か寺に対して、室町・

は一、一五三か寺となり、それらの十年間の比率は、前者が二二か寺であるのに対し後者は六六か寺となり、室町・戦国時代は南北朝時代の三倍の割に増加している（『江戸洞門政要』五一六一二九頁）。

ところで十四世紀の末葉になると五山の禪は偈頌文学の枝巧に流れ、禪本来の面目を失つたから、志ある禪僧は、五山の叢林を去つて地方の林下に走る傾向にあつた。

曹洞宗の総持寺教団においては、この頃には、こうした

禪僧を中心に、既述のように（『曹洞宗教団展開の概観』の項）、瑩山紹璉、峨山韶碩らによつて曹洞禪の民衆化運動と地方発展の為の教義的、組織的両面の準備は完了し、峨山の二十五哲等によつて既に全国的にその拠点が確立していた。特に曹洞禪が地方領主層の武士階級に迎えられたのは、峨山韶碩以来の正偏五位思想をその教義の理論的支持とし、功勲五位思想を禪修行の実践目標にして主従の身分関係を肯定し、王法即仏法主義を唱えた点にあつたと考えられる。

ところで越後における室町時代（一三九二—一四九〇、—ここでは考察の関係上、戦国時代（一四九一—一五七

二）を除くこととする—）、九九年間に開創・改宗された寺院数（寺伝も含む）は、八九か寺であり、一年に約一か寺足らずの割に建立されていることが知られる。これを南北朝時代の五六六年間に十か寺の建立にくらべると約五倍の多きに達していることがわかる。また室町時代における、後世その地方の中心寺院となつた小本寺の開創数は五九か寺であり、南北朝時代の六か寺に比して約十倍の多きに達している。

次にこの時代に建立・改宗された越後の曹洞宗寺院八九か寺を現在の各地域に分けてみると、下越三八か寺、中越三〇か寺、上越一二か寺、佐渡八か寺、不明一か寺となり、また小本寺を同様に各地域に分けると、下越二九か寺、中越一八か寺、上越八か寺、佐渡五か寺となり、いずれもその数の多い順からいと、下越、中越、上越、佐渡の順になつてゐる。従つて室町時代越後曹洞禪扶植の密度も、下越、中越、上越、佐渡の順序で深められていつたと考えてよい。

以上の越後・佐渡における室町時代開創・改宗曹洞宗寺院の大勢を表示すると、〔表6〕(1)～(6)のようになる。

さて次に上述の室町時代の禅林界ならびに曹洞宗教団の大勢を背景に、「表6」を参照しつつ越後の曹洞宗教団の展開について具体的に述べてみよう。

### 第三節 太源派の形成と発展

#### 四箇道場の形成

越後においては、室町時代に入ると、曹洞禪の一大拠点が形成された。即ちそれは、傑堂能勝（一三五五—一四二七）による耕雲寺（村上市門前一四三）の創建とその教団の成立である。傑堂は楠木正成の三男といわれ、峨山の五哲太源宗真（一三七〇）の法孫であり、梅山聞本（一四一七）の法嗣である。師は紀伊国、由良の西方寺に孤峰覚明（一二八七—一三六一）の法嗣古劍智納（一三八三）に受業し、のち通幻寂靈（一三三二—九一）に参じ、ついに越前の龍沢寺に梅山聞本に投じて法を嗣いだ。応永元年（一三九四）二月、瀬波郡杜沢（村上市門前）の小嶺に入つて庵を結び、師梅山を勧請開山として靈樹山耕雲寺を開創したのである。

傑堂は、峨山韶碩—太源宗真—梅山聞本と継承、展開さ

れてきた正偏五位・洞上五位の思想と禪に研鑽し、後にこれを僧俗日常の修禪生活に活用した「主位客位共以ニ階級ニ座着」とする「靈樹山日用清規」の基となした。耕雲寺は、後世、村上義明の外護を受け、直末八一（七九）か寺（注、（ ）内は延享二年—一七四五—調査の数、以下同）、孫末以下七〇八か寺、総数七八九か寺（但しこれは越後国内だけの数ではない）の門葉を有する越後曹洞禪の最大の本寺として隆々たる発展をとげ、曹洞宗教団の一翼を担つて耕雲寺教団を形成するに至つた。

傑堂には、顯窓慶字（一一四三三）、南英謙宗（一三八七—一四五九）、虛廓長清（一四五五）の三人の法嗣がいる。

このうちまず顯窓慶字は、南魚沼郡塩沢町雲洞に赴き、師傑堂が応永二十七年（一四二〇）閑居して旧真言律院を禪寺として改宗し、上杉憲実が再興して開基となつた雲洞庵の第一世となり、師傑堂を開山として永享元年（一四二九）祝國開堂の儀を挙げ、五位の玄風をこの地に扶植したのである。雲洞庵はその後、上杉・武田両氏、宇佐美氏らの戦国武将の帰依を得て栄え、信濃龍雲寺以下直末二七

宗寺院一覧表(1)

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑堂	總持寺	七 九	81	村上市門前 143	
天真	大輪寺			北蒲原郡中条町西条町1-74	長寛2(1663)年真言宗長寿庵として創立、觀応2(1351)年玄翁円福寺として改宗、寛文3(1163)年現山寺号
傑堂	雲洞庵	七	7	新発田市中央町 2-2-7	雲洞庵の開創が1429年なのでその3世が1394年に当山開創は疑問
天真	宝光寺	八	8	新発田市大字五十公野5027	開創時は補陀山慈眼寺と称す。複雑な経緯を経て寛文12(1672)年現山寺号
了庵	村松英林寺	0	2	北蒲原郡安田町 大字保田2351	天正年間(1573-91)英林寺開山乾峰雲貞により中興
天真	名立寺			西頸城郡名立町大平谷	元亀2(1571)年名立寺2世立応英建により中興

○印末寺5か寺以上を持つ本寺。以下同。

宗寺院覧表(2)

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑堂	越前龍澤寺	一 三	20	中蒲原郡村松町蛭野 780	天文年間(1532-5)荒廃、寛延年間(1748-50)空印寺衡田祖量再興
普濟	越前宝円寺	七	7	中魚沼郡川西町中屋敷1168	
如仲	遠江大洞院	○	3	新発田市上寺内 846	
傑堂	耕雲寺	五	5	北蒲原郡黒川村東牧	万治年間(1658-60)耕雲寺7世審岩正察(~1503)を開山の傍位となし曹洞宗に正式に改宗、耕雲寺客末
傑堂	耕雲寺			岩船郡朝日村葡萄 332	元和5(1619)年以前耕雲寺18世日通雲良(=1619)中興
源翁	岩代示現寺			東蒲原郡鹿瀬町大字実川	寺伝では永正6(1509)年示現寺7世桃溪開基、現廢寺
源翁	岩代示現寺			新発田市上赤谷2807	
傑堂	天樹寺			北蒲原郡豊浦町大字岡屋敷	天樹寺の曹洞宗改宗は文明9(1477)年なので一通得倍の1417年開創は疑問
天真	信濃興禪寺	四	4	西頸城郡名立町大町 270	寺伝では天正17(1589)年、一一説永正17(1520)年—信濃興禪寺順興により中興
傑堂	種月時	十四	8	佐渡郡羽茂町大字 羽茂本郷2075の甲	
傑堂	本田寺			佐渡郡真野町金丸 716	

〔表6〕 越後・佐渡室町時代（1392～1490）開創・改宗曹洞

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
応永元	1394	雲樹山	耕雲寺		勸請 梅山聞木	傑堂能勝 (1355—1427)
○ 応永元	1394	長寿山	太總寺		勸請 峨山韶碩	玄翁源妙
○ 伝応永元	伝1394	菩提山	福勝寺		雲洞庵3世 悦央祖闇 (~1470)	佐々木治長
○ 応永3	1396	福聚山	来迎寺	聖観音	勸請中興 超天玖越 (~1644)	如仲天闇
応永5	1398	安田山	宗壽寺	阿弥陀如来	玄翁真照	
応永6	1399	布袋山	昌禪寺	薬師如来	立川寺3世 日山良旭	中興 村山安芸守

越後・佐渡室町時代（1392～1490）開創・改宗曹洞

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
○ 応永19	1403	明白山 字慶院	慈光寺		傑堂能勝	嶽城主 神戸太郎最重
○ 応永15	1408	龍雲山	長福寺		高巖理柏 (~1436)	下平吉良
応永18	1411	白龍山	慈雲寺		勸請か 如仲天闇 (1395—1433)	慈雲寺2世 不琢玄珪 (1387—1449)
○ 応永18	1411	龍國峰 金華山	東牧寺	聖観音	唐僧 大通俊英 (~1436)	
応永19	1412	南陽山	松光寺		傑堂能勝	
応永20	1413	岩屋山 (高陽山)	山溪寺		示現寺2世 天海空広 (1343—1416)	僧桃溪
応永23 以前	1416 以前	重福山	龍泉寺		示現寺2世 天海空広	小田切三河守
伝 応永24	伝1417	明白山	見龍寺	千手観音	天樹寺3世 一通得倍	白山民部頭
応永26	1419	江崎山	名立寺	聖観音	越中立川寺 月桂立乗	
○ 応永28	1421	天沢山	大蓮寺	阿弥陀如来	種月寺3世 本嶽宗悟 (~1472)	羽茂地頭 本間対馬守真本 入道
応永31	1424	水月山	種徳院	聖観音	中興本田寺9世 雪山要吾 (~1669)	本間佐渡守時直

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑堂	香伝寺			新発田市東宮内 377	慶長年間(1596—1614)香伝寺7世了山明誕により中興,普聞庵を改め現山号とする
普濟	陸奥宗徳寺	八	8	柏崎市西本町 3-4-3	元天台宗
傑堂	慈光寺	二五	27	南魚沼郡塙沢町 大字雲洞 660	一世頭窓慶字(—1433)実際の開山,この年祝國開堂
傑堂	佐渡本田寺			佐渡郡佐和田町 大字中原 385	寺伝では,開創は明応3(1494)年である
傑堂	耕雲寺	三	3	北蒲原郡黒川村下館1766	元真言宗高徳寺,文禄3(1594)年耕雲寺14世剛安寿金(~1596)により移建中興,現山寺号
了庵	淨広寺			刈羽郡高柳町大字高尾1255	發創開山不琢玄珪
了庵	長福寺			中魚沼郡中里村倉俣甲1451	
了庵	洞照寺	三	4	長岡市雲出町1527	清公比丘尼建立の五庵を草山香林寺と改名し開山となる

宗寺院一覧表(3)

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
了庵	下野瑞光寺	五	5	北魚沼郡小出町字千溝1414	この年祝國開堂,開創は永享年中(1429—40)といい,一説文安5(1448)年という
実峯	能登龍護寺			上越市大字土口 186	元真言宗
天真	転輪寺			柏崎市黒滝1736	開創一説永正10(1513)年以前
大徹	長命寺			東頭城郡松之山町 松之山1209	天正2(1574)年陽廣寺2世堯雲泉竜中興開山,14代村山正直(—1613)中興開基,陽徳庵を現山寺号に改む
傑堂	寶積寺	三	3	村上市羽黒町12-30	文正元(1466)年の頃珊瑚文愛九臯庵を現山寺号に改む
傑堂	耕雲寺	二三	25	西蒲原郡岩室村石瀬3356	享徳2(1453)年伽藍完成
了庵	相模松石寺	五	5	長岡市乙吉町3316	文安4(1447)年密教宗安樂寺として草創
天真	宝光寺	一	1	豊栄市長戸呂 777	寛文9(1669)年華報寺をはなれ宝光寺末となる
傑堂	慈光寺	七	7	中蒲原郡村松町甲5797	
了庵	朝日寺			柏崎市黒滝1522	

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
応永年間	1394 —1427	神照山	宝岩寺	観音	普聞	
応永年間	1394 —1427 —説1455	飯涌山	香積寺		金沢宗徳寺2世 龍伝惠金 (~1464)	柏崎勝長
永享元	1429	金城山	雲洞庵		傑堂能勝	関東管領 上杉憲実
永享4	1432	三峯山	玉泉寺		本田寺開山 麗天宗果 (~1538)	東福城主 本間近江守源高直
嘉吉元	1441	万松山	増慶院	千手観音	勸請 南英謙宗 (1387—1459)	黒川城主 黒川備前守為実
嘉吉元	1441	円通山	広済寺	如意輪観音	中興か 盛岩文栄	佐藤朝広
嘉吉元	1441	草玉山	東光寺	薬師瑠璃光 如来	長福寺3世 笑顔舜葩	
文安元	1444	萬松山	香林寺		洞照寺4世 章山梵芸	長尾頼影・為景 天甫清公比丘尼

## 越後・佐渡室町時代（1392～1490）開創・改宗曹洞

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
文安元	1444	貴福山	林泉庵		瑞光寺3世 法山謙正 (1407~95)	
文安元	1444	桃源山	靈雲寺		能登竜護寺20世 中岩有正	佐藤太郎右衛門
文安2	1445	鷲栖山	長泉寺		転輪寺2世 利天用聰 (~1513)	上条城主 上杉兵庫頭清方
文安2	1445	繁茂山	陽広寺		長命寺4世 大應益周	村山藤右エ門 (~1453)
文安3	1446	飯野山 山居林	龍阜院	華嚴釈迦 如来	耕雲寺5世 徳嶽宗欽 (~1488)	
文安3	1446	福地山	種月寺		耕雲寺3世 南英謙宗	上杉房朝
文安4	1447	安樂山	龍穩院	上品阿弥陀 如来	中興公器憲章 (~1522)	天異慶順
文安年間	1444 ~48	広喜山	長安寺		端雄寅洲 (~1663)	華報寺芳庵尖頤 (~1544)
宝徳2	1450	大田山	安養寺	阿弥陀如来	慈光寺4世 南心祖陽 (~1453or62)	太田摂津守嗣子 某, 村田大隅守
享徳元	1452	成沢山	龍雲寺		朝日寺3世 龍雲玄珠	上条城主 上杉清方 大橋弥次兵宗英

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑堂	佐渡大蓮寺	六	2	佐渡郡真野町竹田 779	開創当初貝塚村にあって雷沢山法久寺と称す
傑堂	種月寺	三	3	三条市本町3-2-15	当寺中興2世臨芳竜頤(-1475)伽藍建立、師月田を請じ開山とする
傑堂	東牧寺	二	2	岩船郡関川村湯沢 694	
了庵	上野雙林寺			十日町市大字下組3653	元広良寺、文明17(1485)年太法興禪再建現寺号、雲峰闍悦(-1644)中興
天真	攝津円通寺	六	6	中頸城郡吉川町大字天林寺	
傑堂	種月寺			西蒲原郡岩室村字岩室1059	
石屋	薩摩福昌寺	四	4	北蒲原郡豊浦町大字吉浦	元真言宗、開創一説寺伝永正15(1518)年頃か
了庵	朝日寺			刈羽郡小国町千谷沢 464	

宗寺院一覧表(4)

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
如仲	信州常慶院	二	2	東頸城郡松之山町 観音寺 150	興國4(1343)年創立、元真言宗
傑堂	大蓮寺			佐渡郡畠野町大字多田 304	寺伝寛正4(1463)年開基
傑堂	耕雲寺	六	6	刈羽郡刈羽村赤田北方2885	開創年に享徳3(1454)年、長享2(1488)年の説あり、実際の開山耕雲寺4世瑚海仲珊(1402-69)
了庵	觀音寺	二	2	東蒲原郡鹿瀬町 大字大鹿瀬7801	草創安貞元(1227)年臨濟宗
了庵	林泉庵	一	1	刈羽郡小国町桐沢2145	応永11(1104)年僧普門草創といふ、開創年に寛正6(1465)年、文龜2(1502)年の説あり
大徹	覺皇院			東頸城郡松代町1932	立山宗聟覺皇院在住1637-38年とするとこの年の開山は疑問
了庵	龍穩院	八	8	栃尾市大字北荷頃 769 の甲	開創一説永正11(1514)年
傑堂	雲洞庵			南魚沼郡塩沢町 大木六第 689	開基当初長慶庵といい、後中絶、雲洞庵6世康山猷映再建、通天存達の時繁栄、寛永15(1638)年以後現寺号
大徹	越中大川寺	○	1	東頸城郡松代町松代	初め觀音堂と称し現松代町室野地区にあった

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
享徳元	1452	寿宝山	太運寺		東惠隣悦	本間信濃守長信
康正元	1455	大槻山	宗正寺		勸請 月田宗種 (~1465)	
康正2	1456	如意山	松岳寺	大日如来	玉翁守瑄 (~1470or72)	津野源太夫
長禄元	1457	鶴嶺山	広大寺	聖観音	疊英慧応 (~1504)	
○長禄2	1458	法住山	転輪寺		雷庵性隆 (1422-93)	長尾為景と妻 上杉謙信
	1459 以前	黃梅山	松岳寺	聖観音	南英謙宗	円明保智尼
	寛正元	瑞雲山	長善寺		薩摩福昌寺6世 檀嶺元郁 (~1538)	
	寛正元	満松山	龍光院		朝日寺9世 南嶺全継	佐藤義信・頼尚

## 越後・佐渡室町時代（1392～1490）開創・改宗曹洞

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
寛正元	1460	大通山	觀音寺	十一面觀音	信州常慶院7世 智嶽天察 (~1527)	伊勢備前守盛富 ・盛種
寛正元	1460	大旗山	崇運寺		大蓮寺5世 輝照燈惠	多田城主 本間信濃守
寛正2	1461	瑞應山	東福院	聖観音	勸請 南英謙宗	赤田城主 斎藤下野守昌信
寛正2	1461	妙峰山	多宝寺	大日如来	觀音寺 可山全津	臨濟多宝院 僧寅身
寛正3	1462	鳳住山	桐盛院		林泉庵4世 竹巖全虎 (~1522)	渡辺弥五右衛門
寛正3	1462	万寧山	廣德寺		能登覺皇院9世 立山宗譽	斎木久兵衛
○寛正4	1463	万年山	曹源寺	聖観音	相模松石寺2世 公器賢(憲)章 (~1533)	柄尾城主北畠 山城守傑山董英
	1463	鬼伏山	龍泉院	阿彌陀如来	雲洞庵3世 悅叟祖闡 (~1470)	大木六城主 尻高平龜鬼丸, 同族実綱
	1465	福聚山	長命寺		越中大川寺3世 觀岳紹忻 (~1474)	鈴木五右衛門

現在ノ派系	本寺	末寺数			現在所	備考
		延享	昭和	10		
石屋	丹波永沢寺				府内至徳村字屋敷に在ったとされるが不明	至徳年間(1384—6)久庵僧可により臨済宗として開創、その後法系断ち、この年曹洞宗に改宗するも、現在廃寺
傑堂	慈光寺	七	7		南蒲原郡下田村 大字森町 840	
傑堂	東福院	七	7		中頸城郡吉川町 大字赤沢 246	至徳寺・安国寺と共に越後の三大名刹(万里集九『梅花無尽藏』)
傑堂	種月寺				三島郡寺泊町寺泊1613	延長6(928)年天台僧觀弁西向庵建立、文和2(1353)年夢窓疎石(1275—1351)臨済宗蘭泡寺と改称、寛永3(1626)年骨外芳徹再興
了庵	下野大中寺	二	15		東頸城郡浦川原村 大字頭聖寺 583	当寺では2世黙室周言も開山としている
了庵	長緑寺	十七	18		北蒲原郡安田町 大字草水 751	永禄年中(1558—69)謙信越雲山徳泉寺として法地昇格、宝暦6(1756)年至徳寺の故地に再建
了庵	観音寺	六	5		三島郡越路町大字朝日 531	元天台宗、永禄10(1567)年上杉謙信寺塔をおこし、寺禄寄付
傑堂	羽前龍言寺	一	1		南魚沼郡六日町東泉田 344	天文4(1535)年焼失、慶長3(1598)年中興開基

宗寺院一覧表(5)

現在ノ派系	本寺	末寺数			現在所	備考
		延享	昭和	10		
太初	羽前善宝寺	一	1		新潟市西堀通三番町 797	
傑堂	種月寺	十一	9		佐渡郡佐和町中原 364	草創は宝永31(1424)年、本間時直による
傑堂	定明寺	二	2		南蒲原郡栄町大字 北潟甲1013	一説、定明寺2世巨山禪益(~1505)、長禄2(1458)年に再興
天真	越前靈泉寺	三	3		上越市寺町3丁目9番39号	寺伝では文明2(1480)年国府に開基、慶長年間(1596—1615)福島城下に移り、寛文年中(1661—73)現地へ建立
傑堂	耕雲寺	九	9		新発田市上三光1276	草創開基承和13(846)年元天台、真言宗
了庵	下野瑞光寺	七	7		北魚沼郡広神村 今泉2126ノ甲	
無底	正続寺				北蒲原郡加治川村 大字向中条 397	寺伝開創天文元(1532)年
傑堂	慈光寺				中蒲原郡村松町 大字安出 129	

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
寛正年間	1460～65	聖壽山	至徳寺		丹波永沢寺 器之為璠 (1404～18)	
○文正元	1466	雲瀧山	長禪寺		慈光寺6世 海翁 静鎮 (~1492)	長尾因幡守豊景 中興 長尾遠江守景久
○文正元	1466	瑞鳳山	雲門寺		東福院2世 瑚海仲珊瑚 (1402～69)	島倉大炊源忠義 (心空覺田庵主)
応仁元	1467	医王山	円福寺		能登冰見村 素生玄的	
○応仁元	1467	保寧山	頭聖寺		下野大中寺間山 快庵妙(明)慶 (~1492)	坊金城主 石田大膳小弼
○応仁2	1468	臨沢山 柏樹林	觀音寺	聖観音	奥州長祿寺開山 勸請か 月窓明潭 (1425～77)	長祿寺2世 樹山庭柏(~1521) 上杉謙信
○応仁2	1468	医王山	朝日寺	十一面觀音	觀音寺2世 樹山庭柏 (~1521)	木曾義仲巴御前
応仁2	1468	三峰山	永昌庵	阿弥陀如来	羽前龍言寺6世 峯巌存作 (~1571)	長尾能景, 上杉 謙信, 堀直寄 (中興)

## 越後・佐渡室町時代（1392～1490）開創・改宗曹洞

開創年代		山号	寺号	釈迦以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
応仁2	1468	金青山	瑞光寺		羽前善宝寺2世 天與是準 (~1451)	
○応仁2	1468	松雲山	本田寺		種月寺6世 麗天周果 (~1538)	東福城主 本間佐渡守時直
文明元	1469	大龍山	雲居寺		瑚海仲珊瑚 (1402～69)	
文明元	1469	海潮山	高安寺		越前靈泉寺2世 華庭籌英	長尾能景
○文明2	1470	金滝山	宝積寺	聖観音	耕雲寺5世 徳嶽宗欽 (~1488)	竹俣清忠
○文明2	1470	曹溪山	真福寺		法山謙正 (1407～95)	
文明3	1471	清巖山	福樂寺	十一面觀音	正統寺7世 桂室秀香 (~1536)	
文明5	1473	永澤山	天照寺	聖観音	慈光寺8世 賢室宗玉 (~1528)	

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑堂	華報寺	一	1	新潟市西堀通り3番町 804	
普濟	香積寺	六	5	佐渡郡金井町吉井本郷 466	開創一説、永正9(1512)年
天真	常陸金龍寺	四	6	五泉市錦町2番35号	開創一説文亀元(1501)年、永禄5(1562)年興隆寺を現寺号とする
普濟	越中瑞龍寺	二	2	柏崎市原町3番23号	開創一説元和2(1616)年、寺伝文明18(1486)年、長尾重景、能景開創
傑堂	雲門寺	二	2	中頸城郡三和村大字大1506	開創寺伝文明元(1469)年宗昇によって開基、一説延徳元(1489)年
傑堂	耕雲寺	十一	8	村上市大字岩船1092	天正元(1573)年、一説永禄7(1564)年巖室文松(～1592)中興、元天台宗感應寺
傑堂	慈光寺	一	1	中蒲原郡村松町中名沢字家の浦	
傑堂	耕雲寺	十	11	北蒲原郡笛神村出湯 794	大周元(806)年空海建立、真言宗五頭山海満寺、中世天台宗、臨済宗無闇普門中興

宗寺院一覧表(6)

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享	昭和 2 10		
傑堂	耕雲寺	三	4	北蒲原郡笛神村勝屋1741	白鳳時代(655—700)草創、法根宗、建長のころ(1249—56)臨済宗
石屋	紀伊安樂寺	四	4	三島郡与板町上ノ山6025	
天真	来迎寺	一	1	新発田市五十公野1766	天正10(1582)年草創、中絶の所、渋谷近栄新寺建立、宝珠山桂昌寺とす、江戸期来迎寺2世端雄光洲中興開山
傑堂	雲洞庵	三	5	両津市河崎 283	開闢は大同年間(806—9)と伝え康暦2(1380)年本間直泰再興禪刹とす
傑堂	華報寺	三	3	北蒲原郡水原町北本町 441	天正年間(1573—91)水原兼則中興開基、開創一説天正2(1564)年
了庵	吉藏寺	五	4	柏崎市大字善根7471	開創一説天正年間(1573—91)
了庵	普濟寺			長岡市土合5丁目9番11号	文明年中(1483—85)慶得院として存在、元和4(1618)年中興開山
傑堂	慈光寺	八	9	五泉市大字橋田戊 883	草創正中元(1324)年、建武年中(1334—35)説あり、天文6(1537)年平賀為資宝生山を護陽山と改む
了庵	朝日寺	四	4	長岡市村松町4203	

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
文明5	1473	松樹山	法音寺		太安(菴)梵守 (1407—82)	
○	文明5	1473	松樹山	剛安寺	香積寺5世 通山長徹	藍原藏人秀棟
○	文明6	1474	龍雲山	興泉寺	常陸金竜寺4世 燈(然)芝等忻 (~1528)	甘糟備後守景継
文明6	1474	月岡山 (光)	普光寺		越中瑞竜寺2世 快翁芸悦 (応)(雲) (~1625)	長尾重景正 長田村
文明6	1474	少林山	禪長院		雲門寺2世 鼎(渕)山宗尋 (~1490)(存葬)	
○	文明7	1475	海巖山	諸上寺	徳嶽宗欽 (~1488)	中興 本庄繁後 長堀丹
文明8	1476	万年山	龍耕寺	薬師如来	慈光寺8世 賢室宗玉 (~1528)	
○	文明9	1477	五頭山	華報寺	耕雲寺6世 太菴梵守 (1407—82)	

## 越後・佐渡室町時代（1392～1490）開創・改宗曹洞

開創年代		山号	寺号	釈迦以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
文明9	1477	勝屋山	天樹寺		耕雲寺5世 徳嶽宗欲 (~1488)	柏雲天樹
文明11	1479	香積山	徳昌寺	十一面觀音	紀伊田辺安楽寺 2世 耕陰道夫 (~1486)	直江実綱中興 牧野内膳將 三輪権平
伝 文明12	1480	寶珠山	光源寺		慈雲寺9世 大蟲宗峯 (大忠存嶺)	渋谷治部少輔近 栄(入道淨心)
○	文明15	1483	龍寿山	晃照寺	中興雲洞庵4世 雪心祥立 (~1490)	本間加賀守 源直泰
文明年 中	1470 —1482	能満山	長樂寺	阿弥陀如来	太庵梵守 (1407—82)	水原常陸助 兼(親)則
○	文明17	1485	瑞瀧山	淨広寺	吉藏寺3世 大通文裔 (~1521)	八石城主 毛利淨広 (~1574)
文明15 ~17 存在	1483 ~85	高尾山	慶徳寺	延命地藏尊	中興普濟寺8世 伝室龍的	中興 牧野忠成
○	文明年 間	1469 ~86	護陽山 祥雲台	吉祥寺	慈光寺8世 堅室宗玉 (~1528)	護摩堂城主 平賀左京亮盛義 中興平賀為資
文明年 間	1469 ~86	金城山	洞照寺	十一面觀音	朝日寺 一山恵桃	月船長部 (~1516)

現在ノ派系	本寺	末寺数		現在所	備考
		延享 2	昭和 10		
	地蔵院			三島郡越路町岩田785	寿永3(1183)年本尊来迎と伝う、明治18(1885)年再建、尼寺
如仲	信濃常慶院			中魚沼郡津南町大字上郷寺石	
傑堂	香伝寺	七	7	三条市東裏館1丁目10-3	草創文保2(1318)年天台宗か
傑堂	雲洞庵			南魚沼郡塩沢町思川139	元密教寺実際庵あり、天正元(1573)年6世堅室の時、天昌寺と改む、慶安元(1648)年説端嫩重(-1655)再開山

(二五)か寺を有する越後、佐渡、信濃、出羽にまたがる曹洞禪の一大拠点となつた(拙稿「耕雲寺の歴史と傑堂・南英師資の偉業について」)。『祖傑堂能勝禪師五百五十九回大遠忌記念誌』(村上市耕雲寺発行、昭和五十一年九月)。

つぎに南英謙宗は、師傑堂と共に洞上五位思想を集大成した『顕訣耕雲註種月據據藁』や、『碧巖鈔』、『耕雲傑堂和尚之入室』(曹洞宗実踐叢書)第十卷—大藏舎発行、昭和六十一一年四月)。

つぎに南英の法弟虛廓長清は、阿賀野川流域の中蒲原郡村松町蛭野の慈光寺に、師傑堂、法兄顕窓の後を継いで三世となつてその經營に当り、教団の基をきづいた。慈光寺は、当地の領主神戸太郎最重が平安の古刹を再興して開基となり、応永十年(一四〇三)、傑堂能勝を請じて開山としたとされる洞門の禅寺で、後世、直末二〇(二三)か寺、孫末以下総数一五〇か寺を有する大教団として隆盛を極めた。

開創年代		山号	寺号	釈迦如来以外の本尊	開山	開基
日本	西暦					
文明年間	1469～86	瑞雲山	淨光寺	阿弥陀如来	中興珠山天明	
長享2	1488	八幡山	吉祥寺		信濃常慶院7世智嶽天察 （～1541）	野本茂
。 延徳元	1489	泰陽郷少林山	定明寺		中興香伝寺2世三陽泰	三条左エ門定明
延徳2	1490	飯盛山	天昌寺		雲洞庵7世禪朴倫 （～1516）	實

以上のように太源派傑堂系の越後の曹洞禪は、応永元年（一三九四）から文安三年（一四四六）の約半世紀の間に、岩船、蒲原、魚沼の地方に、それぞれ耕雲寺、種月寺、慈光寺、雲洞庵の四寺院を中心にして、いわゆる「越後四箇の道場」の源流を形成し、その後この教団は、ほかの峨山派曹洞禪を圧倒して越後に君臨するにいたつたのである。

さて太源派—傑堂系の「越後四箇の道場」は、十五世紀の中葉以後はそれぞれの寺院を中心にして教団として発展をとげるが、それも発展の過程において耕雲寺を大本寺とする耕雲寺派と慈光寺を大本寺とする慈光寺派に分かれて発展をとげていった。この際、越後四箇の道場のうち種月寺は耕雲寺派に、雲洞庵は慈光寺派にそれぞれ所属し、その直末とされるに至った。次にこれら両派教団の展開の様相を述べてみよう。

#### 〈耕雲寺派の活動〉

ところで十五世紀の初頭に注目すべき伝承がある。それは中国五山第一の徑山興聖万寿禅寺住持の末裔とされる大通俊英という中国僧が、浙江省の金華から敦賀（福井県）に上陸して、応永十八年（一四一一）北蒲原郡黒川村東牧に足跡を印して東牧寺を開創したということである。事実とすれば、これは中国禪が能動的に直接越後に伝來した最初ということになる。しかしその後、東牧寺は火災によつて焼失しその法燈は絶えた。そのうち東牧寺は、十五世紀の末葉から十六世紀の初めの間に耕雲寺七世審岩正察（一五〇三）が再興したようでその開山所に準ぜられた。そ

となし、正式に曹洞宗に改宗され、耕雲寺客末となつた。

この間に東牧寺は、康正二年（一四五六）開創の松岳寺（岩船郡関川村湯沢六九四）以下末寺五か寺を持つ曹洞禪の小本寺となつた。

これよりさき、耕雲寺三世・種月寺開山南英謙宗は、嘉吉元年（一四四一）、北蒲原郡黒川村に、領主黒川氏の外護を得て、元真言宗寺院高徳寺を再興したが、のち文禄三年（一五九四）、耕雲寺十四世剛安寿金（一五九六）が現在所下館一七六六の地に移建中興して増慶院と改称し、後世、三か寺の末寺を持つに至つた。

ついで耕雲寺五世徳嶽宗欽（一四八八）は、文安三年（一四四六）、村上市羽黒町一一一三〇の地に草庵を結んで九臯庵と名づけたが、その後、文正元年（一四六六）のころ法孫の珊瑚<sub>（山）</sub>文愛が中興して龍皇院と改め、のち末寺三か寺を有する小本寺となつた。

ところで徳嶽は、文明七年（一四七五）、村上市岩船一〇九二にあつた元天台宗感應寺を諸上寺と改め、曹洞宗に改宗し耕雲寺末としたのである。諸上寺は、後に永祿七年（一五六四）、耕雲寺十三世岩室文松（一五九二）が本

庄繁長の勧請で中興開山となり、江戸時代、村上藩主の帰依を受けて栄え、末寺八（十一）か寺を持つ小本寺となつた。続いて徳嶽は、文明九年（一四七七）北蒲原郡笛神村勝屋一七四一の地に、のちに末寺四か寺を有する天樹寺を再興した。天樹寺は白鳳時代（六五五—七〇〇）草創を伝える元法相宗で、建長のころ（一二四九—五六）臨濟宗となつた歴史的古刹である。さらに師は、これよりさき文明二年（一四七〇）、新発田市三光一一七六の地に赴き、承和十三年（八四六）草創の天台・真言宗寺院宝積寺を領主竹俣氏の外護で曹洞宗に改め、のちに末寺九か寺、孫末等十二か寺を持つこの地方の耕雲寺教団の基盤を確立し、畢生の教化に努めた。

このようにして耕雲寺教団の主流は、まず発祥地の村上市および北蒲原郡、新発田市を中心とした下越地方に教団発展の基盤を確立したのである。

さて一方、耕雲寺四世瑚海仲珊瑚（一四〇二—六九）は、寛正二年（一四六一）<sup>（一説、享徳三年—一四五四—、長享二年—一四八八—）</sup>刈羽郡刈羽村赤田北一八八五の地に、赤田城主斎藤昌信の外護を得て東福院を開創し、師南

英謙宗を勧請して開山とした。瑚海は、留明十九年の研鑽と経験を生かして教化活動に励み、後世、信濃広徳寺以下直末六か寺、孫末寺四十四か寺を有する東福院教団の寺基を固めた。

かくて東福院は、そののち中越地方における耕雲寺系主流教団の大本寺となつたのである。

また瑚海は、文正元年（一四六六）、中頸城郡吉川町大字赤沢二四六の地に入り、雲門寺を開創した。万里集九の『梅花無尽藏』によれば、雲門寺は、至徳寺、安国寺（この二寺は現在いずれも不明）と共に、越後の三大名刹として讃えられたが、ために瑚海の「法幢大ニ興り、衆万指ニ盈」<sup>み</sup>ちて（『日本洞上聯燈錄卷第六』）、洞上五位の玄風大いに振るつた。雲門寺は、東福院を本寺と仰ぎ、宝寿院等直末七か寺を持ち、大広寺等多数の孫末寺を統べる耕雲寺派教団の上越地方の一大拠点となつた。

さらに瑚海は、文明元年（一四六九）以前に、南蒲原郡栄町大字北潟甲一〇一三の地に下り、雲居寺を開創した。雲居寺は、その後一時衰えたが、永正二年（一五〇五）以前に瑚海の七世の法孫定明寺一世巨山禪益（一五〇五）

によって再興され、末寺二か寺を有する小本寺としてこの地方の耕雲寺派教団の一拠点となつた。

つぎに注目すべきは、すでに「越後の臨濟禪の扶植」の項において述べたように、これまで、大同元年（八〇六）の草創と伝えられ、真言・天台・臨濟・時宗と多彩な宗教活動および幾多の変遷をくりかえしてきた華報寺（北蒲原郡笛神村出湯七九四）が、文明九年（一四七七）耕雲寺六世大菴梵守（一四〇七～八二）によって曹洞宗に改宗されたことである。そののち華報寺は、長樂寺（北蒲原郡水原町北本町四四一）、法音寺（新潟市西堀通り三一八〇四）など末寺十一（十）か寺を有する洞門小本寺の一大拠点となつたのである。

次に耕雲寺派種月寺系の越後内の活動について少しく敷衍し、ついで佐渡への進出について述べてみよう。

まず種月寺二世月田宗種（一一四六五）の法嗣臨芳龍願（一一四七四）は、康正元年（一四五五）、三条市本町三一五一に宗正寺を建立し、本師の月田を勧請して開山となし、自らは中興二世の位についたが、のち末寺三か寺を持つ小本寺となつた。そのほか、曩祖南英謙宗を開山と

仰ぐ松岳庵（西蒲原郡岩室村字岩室一〇五九）があり、開創後、種月寺十九世洞外禪明（一六六六—一七二七）が中興したが、その後衰え、清堂万貞によつて再建され、昭和十七年（一九四二）松岳寺と改称された。また三島郡寺泊町寺泊一六一三に円福寺がある。円福寺は、長享六年（九二八）天台僧觀弁の建立と伝えられ、そののち文和二年（一三五三）、夢窓疎石（一二七五—一三五一）によつて臨濟宗蘭泡寺と改称されたが、その法灯は中絶し、応仁元年（一四六七）能登永見村の洞門僧素生玄的の来越入寺によって復興し、曹洞宗に改宗され円福寺と改められた。その後、寛永三年（一六一六）、種月寺十三世骨外芳徹（一一六五七）が中興し、円福寺は、耕雲寺派種月寺系に属することになったが、この地方の曹洞禪教化活動の一拠点となつて現在に至っている。

さてこれよりさき、佐渡においては、応永二十八年（一四二一）、佐渡郡羽茂の地頭本間対馬守真本入道が大蓮寺（佐渡郡羽茂町大字羽茂本郷二〇七五の甲）を開創して、種月寺三世本嶽宗悟（一一四七二）を請じ、開山とした。そののち大蓮寺は隆々たる発展をとげ、太運寺（佐渡郡真

野町竹田七七九）、崇運寺（同郡畠野町大字多田三〇四）など八（十四）か寺の末寺を持つ佐渡洞門の中心小本寺となつた。ついで応永三十一年（一四二四）、東福城主本間佐渡守時直は、佐渡郡佐和田町中原三六四の地に本田寺を開創し、その後、応仁二年（一四六八）、種月寺六世麗天周果（一一五三八）を請じて開山とした。そののち本田寺は、種徳院（佐渡郡真野町金丸七一六）、玉泉寺（同郡佐和田町大字中原三八五）など末寺九（十一）か寺を持つ小本寺となり、大蓮寺とならんと、佐渡島内の耕雲寺派種月寺教団の二大拠点を形成したのである。

以上のような十五世紀中葉代を中心とした傑堂系耕雲寺派の活動に対し、傑堂系慈光寺派の活動はどうであったか、次に述べてみよう。

#### （慈光寺派の活動）

慈光寺派の活動としては、まず慈光寺四世南心祖陽（一一四六二）が宝徳二年（一四五〇）中蒲原郡村松町甲五七九七に安養寺を開創したことがあげられる。安養寺は、昭和二十六年（一九五一）全焼して資料が煙滅したが、耕雲寺・雲洞庵・種月寺・慈光寺の四箇の道場を除いて、普藏

院輪番地寺院中、最も早く開創された名刹であり、長寿院（中蒲原郡村松町上戸倉一三五八）岩代国（福島県）の常樂寺（耶麻郡西会津町野沢）以下六（七）か寺を持つ小本寺で、慈光寺教団の基盤を固めた最初の寺院といえよう。

つぎに慈光寺六世海翁<sup>(静)</sup>承鎮（一四九二）は、文正元年（一四六六）五月、長尾因幡守豊景を開基とし、南蒲原郡下田村大字森町八四〇に長禪寺を開創した。長禪寺はそのち長尾豊景の子遠江守景久の外護を得て発展をとげ、後世、栄運寺（南蒲原郡下田村原八九四）、長見寺（同郡同村新屋五六一）以下七か寺の末寺を持つ小本寺となり、この地方慈光寺派的一大拠点となつた。

ついで慈光寺八世堅室宗玉（一五一八）は、文明年間（一四六九一八六）、護摩堂城主平賀氏の招請を受けて、五泉市門前に赴き吉祥寺の開山となつた。その後、吉祥寺は、椎谷城主堀氏の外護を得て栄え、後世、岩松院（五泉寺大字橋田巳四二九）、円通寺（中蒲原郡横越村木津五七八）以下末寺九（八）か寺を持つ小本寺となり、この地方の慈光寺派教団の中心寺院となつた。堅室は、つづいて、文明五年（一四七三）天照寺（中蒲原郡村松町安出）を、

文明八年（一四七六）には、龍耕寺（同郡同町中名沢字家の浦）をそれぞれ開創して教線の拡大に努めたのである。以上、慈光寺派直流の活動であるが、次に慈光寺派雲洞庵系の活動について述べてみよう。

された。

次に雲洞庵四世雪心祥立（一四九〇）は、文明十五年（一四八三）佐渡にわたり、大同年間（八〇六一九）の開創を伝え、康暦二年（一三八〇）、加茂郡久知郷地頭本間加賀守源直泰によつて再興されたが、その後中絶していた晃照寺（両津市河崎二八三）を再建、中興して曹洞宗に改宗した。晃照寺はそののち湖鏡庵以下門末五（三）か寺を持つ島内における慈光寺派雲洞庵系の中心寺院となつた。

ついで雲洞庵七世朴倫禪実（一一五一六）は、延徳二年

（一四九〇）、南魚沼郡塙沢町思川三九にあつた密教寺院実際庵を曹洞宗に改宗し、その後、天正元年（一五七三）六世堅室要固の時、天昌寺と寺号が改められた。そのうち天昌寺は衰え、一時雲洞庵に兼摂されたが、慶安元年（一六四八）雲洞庵二十一世説端嫩重（一六五五）によつて再開山され今日に至つてゐる。

以上、太源派傑堂系の耕雲寺派および慈光寺派の教団発展の大勢を述べてきたが、前者は、村上市・北蒲原郡・新発田市等の北部下越地区および刈羽郡等の中越地区に教団を形成し、その派の種月寺系は佐渡にまで教線を拡げ隆々

たる発展をとげた。一方、後者は、大本寺慈光寺を中心に、中・南両蒲原郡、五泉市等の中部下越地区および中越地区に展開し、その派の雲洞庵系は、新発田市・南魚沼郡の北部下越地区および中越地区に教団を形成すると共に、佐渡にも教線を伸長させた。しかし慈光寺派は耕雲寺派に比べて、その活動は振るわなかつたといえよう。

ところで以上の太源派・傑堂系の活動のほかに、注目すべきは、同じ太源派の如仲系の活動があつたことである。

#### 如仲系の活動

如仲系というのは、傑堂能勝の法弟如仲天闇（一四四〇）の門流をいう。如仲は後に遠江国（静岡県）に大洞院教団を形成し、耕雲寺教団に呼応して、東海道地方に君臨し、五位の玄風を宣揚した巨匠である。師は、応永三年（一三九六）、新発田市五十公野に来迎寺を開創して、越後においてはじめて太源派如仲系の足跡を印したのである。しかし来迎寺はその後衰え、十七世紀初頭の頃に、通幻派天真自性系の宝光寺五世超天玖越（一六四四）によつて中興されて八か寺の末寺を持つに至つた。また如仲の法嗣不琢玄珪（一三八〇—一四四九）は、応永十八年（一四一

一）、新発田市上寺内八四六に慈雲寺を開創し、師如仲を勧請して開山とした。のちに慈雲寺は桃山時代開創の西光寺（新発田市大字菅谷一八二〇）、龍光寺（同市上荒沢四九一）をはじめ末寺三か寺を持つ小本寺に成長した。

ついで十五世紀後半に入り、信濃（長野県）常慶院七世

智嶽天察（一五二一）が、寛正元年（一四六〇）、東頸

城郡松之山町に入り、興国四年（一三四三）創立とされる

真言宗寺院觀音寺を曹洞宗に改宗し、続いて中魚沼郡津南

町大字上郷寺石に至り、長享二年（一四八八）、吉祥寺を開創した。

下つて十六世紀後半に入つて、智嶽の法孫嶽翁天鷲（一五七四）が、永祿四年（一五六一）に、同じく津南町中深見乙一一八八の天台の古刹大龍院を曹洞宗に改宗したのである。

しかし越後においては、如仲系の門流は、傑堂系に圧倒されて振るわず、わずか東頸城・中魚沼二郡の僻陬の地にその法灯を維持するにとどまつた。

#### 第四節 通幻派の進出と展開

さて以上のような太源派の活動の間にあつて、峨山の五

哲の一方の雄、洞門隨一の辣腕家といわれる通幻寂靈を始祖とする通幻派の活動も忘れてはならない。通幻の法嗣には、了庵慧明、石屋真梁、一径永就、普濟善救、不見明見、天真自性、天鷗祖祐、不徳曇貞、芳庵祖巖、量外聖寿らの俊英が輩出した。

#### 普濟系の扶植

これらのうちまず、普濟善救の法系の流れを汲む越前（福井県）宝円寺（開山—普濟の法嗣直伝正祖）四世高巖理柏（一四三六）は、応永十五年（一四〇八）、中魚沼

郡川西町千手中屋敷に城主下平吉良の請に応じて越前より下り長福寺を開創した。こうして越後曹洞禪通幻派の最初の法幢は、豪雪僻陬の地妻有莊に樹立されたのである。その後、長福寺は郡外にまたがる末寺七か寺を有し、この地方の信濃川西岸における曹洞禪の拠点となつた。また同じ通幻派普濟系の龍伝慧金（普濟の法孫、一四六四）は、陸中（岩手県）に大慈寺を開き、文安六年（一四五九）には総持寺に輪住するなど活躍したが、応永年間（一三九四—一四二七、一説康正元年—一四五五寂）に、かつて柏崎勝長が建長年間（一二四九—五五）に建立したとされる天

台宗香積寺を、剣野尾から移転し、現在地柏崎市西本町に再興して曹洞宗に改宗した。香積寺は、後世、陸中（岩手県）報恩寺（盛岡市名須川町三一十五）、陸奥（青森県）法光寺（三戸郡名川町法光寺二二）、佐渡剛安寺（佐渡郡金井町吉井本郷）、羽前（山形県）円照寺（尾花沢市六沢七四一一三）の小本寺を含む直末八か寺、孫末七八か寺を持つ、越後を基盤に東北地方に伸長した稀有の大教団の本寺となつたのである。ついで文明六年（一四七四、寺伝文

明十八年一一四八六一）、長尾重景が剃川庄半田村に晋光寺を開創し、後、元和元年（一六一六）越中（富山県）瑞龍寺二世快応芸悦（高巖理柏の法流・遠孫）を請じ、柏崎に再建した。その後、晋光寺は、寛文年中（一六六一七二）西中通山村を経て、さらに現在地柏崎市原町に移つたが、後世、末寺二か寺を持つ小本寺となつた。

つぎに以上の通幻派—普濟系の扶植について、相模（神奈川県）最乗寺開山了庵慧明を始祖とし、無極慧徹—月江正文—一州正尹の流れを汲む益之永謙の法嗣、下野（栃木県）瑞光寺二世法山謙正（一四〇七九五）が、永享年間（一四二九一四〇）、北魚沼郡小出町字千溝一四六四に林泉庵を開創し、文安元年（一四四四）に祝國開堂の儀を挙げたことに始まる。その後、林泉庵四世竹巖全虎（一五三三）は、

寛正三年（一四六二）、桐盛院（刈羽郡小国町桐沢二四五）を、また明応五年（一四九六）、永林寺（北魚沼郡堀之内町根小屋一七六五）をそれぞれ開創した。同じく五世笑巖舜泰（一五五四）は、十六世紀中葉に、宝泉寺（北魚沼郡小出町干溝二三）を開創して中世における教団の基礎を確立した。そののち林泉庵はさらに末寺二か寺を加え、合計末寺五か寺を持つ小本寺となつた。また林泉庵開山法山謙正は、文明二年（一四七〇）、北魚沼郡広神村今泉一二六ノ甲に真福寺を開創した。真福寺は、後世、戦国時代に開創された長尾氏の祈願所法持寺（三島郡出雲崎町大字勝見九五一甲）、および林昌寺（北魚沼郡小出町大字四日町）の二か寺をはじめ合計七か寺を持つ小本寺となり、

### 了庵系の活動

林泉庵と共に、通幻派—了庵系・瑞光寺派の法城を中越地区の北魚沼の地に築いたのである。

ところで益之永謙の法弟上野（群馬県）隻林寺三世曇英慧応（一四二四～一五〇四）は、妻有莊（中魚沼郡・十日町市）に入り、長禄元年（一四五七）、広大寺（十日町市大字下組三六五三）を開創し、隻林寺派の越後における最初の法幢を樹立した。その後、曇英は、戦国時代に入つて、吉藏寺（小千谷市桜町）、林泉寺（上越市大字中門前）、定正院（長岡市鷺巣町）、普広寺（柏崎市大字北条）を開創して、越後における通幻派—了庵系・隻林寺派教団の確固たる基盤を確立したのである。

一方、これよりさき、無極慧徹の法兄大綱明宗の流れを汲む春屋宗能の法嗣、相模松石寺・上野龍華院開山天異慶順は、法嗣の心華乗方を伴い、文安四年（一四四七）、長岡市乙吉町三三一六の安楽寺と称する密宗寺院に入り、これを曹洞宗に改宗した。その後、天異の法孫公器憲章（一五二二）が、文明五年（一四七三）、中興開山として入寺し、寺号を龍穩院と改めた。そのうち龍穩院は、上杉謙信の家臣、鬼兒島弥太郎の帰依を受けて栄えたといわれ、

後世、末寺五か寺を持つ小本寺となり、越後天異派の源流を形成した。また公器憲章は、柄尾市大字北荷頃七六九ノ甲に、寛正四年（一四六三）の創建を伝える曹源寺に迎えられて開山となつた。曹源寺は、その後、柄尾城主北畠山城守の菩提寺となり、後世、戦国時代開創の東昌寺（柄尾市大字中七四）、智徳寺（見附市本町三）、龍沢寺（北魚沼郡入広瀬村穴沢一一一六）などをはじめ八か寺の末寺を持つ小本寺として発展をとげた。

ところで前述の天異慶順の法弟月窓明潭（一四二五～九六）は、奥州（福島県須賀川市北町三）長禄寺の開山であるが、応仁二年（一四六八）、長尾氏の招請により、北蒲原郡安田町大字草水七五一の地に赴き観音寺を建立した。永禄年中（一五五八～六九）境内にある月窓の隠居所徳泉寺は、上杉謙信の外護によつて法地に昇格され、のち宝暦六年（一七五六）、頸城郡至徳村（直江津）に引寺され、聖寿山至徳寺の故地に再建された。観音寺は、草創以来、上杉（長尾）氏の帰依を得て隆々たる発展をとげ、室町時代に多宝寺（東蒲原郡鹿瀬町大字鹿瀬七八〇一）、朝日寺（三島郡越路町大字朝日五三一）の二か寺を、戦国時代に

入り、嶺寒寺（東蒲原郡上川村字日野川丙九八二）、正法寺（同郡津川町三二四二）、觀音寺（同郡鹿瀬町大字豊実甲一七七九）、大榮寺（中蒲原郡横越村沢梅六九二五）、林昌寺（北蒲原郡安田町保田三二四六）、龍沢寺（東蒲原郡三川村大字岡沢一三三六）、頼勝寺（北蒲原郡安田町大字保田一七二二）、西照寺（同郡同町大字小松五六五）の八か寺をそれぞれ末寺に持ち、後世、合計十八（十七）か寺の末寺を有する大本寺を形成した。しかもその末寺のうち、か寺をそれぞれ末寺に持ち、後世、合計十八（十七）か寺は、通幻派・了庵系の上越地区における最大の教団を形成の末寺を有する大本寺を形成した。しかもその末寺のうち、多宝寺、朝日寺、大榮寺は、それぞれ二、五、四か寺の末寺を持つ小本寺であるから、觀音寺は孫末寺合わせて三十か寺以上を持つ大教団に発展をとげ、下越地区における通幻派・了庵系の一大法城を築いたのである。

さて次にこれよりさき、応仁元年（一四六七）、保倉谷坊金城主石田周防入道大膳少弼は、東頸城郡浦川原村大字顕聖寺五八三に顕聖寺を建立し、月江正文の法孫、下野大中寺開山快庵妙慶（一四九二）を請じて開山となした。顕聖寺はその後、隆々たる発展をとげ、戦国時代には、耕文寺（糸魚川市大字羽生一〇五）、賞泉寺（東頸城郡安塚町安塚一三四五）、觀音寺（同郡大島村大字岡八〇七）、大

安寺（同郡同村大字大平三八八〇）、觀音寺（上越市中央五一一一四六）、宝台寺（東頸城郡浦川原村小谷島五一九）、龍源寺（中魚沼郡津南町中深見乙一一一八）、東林寺（上越市東吉尾寺）の八か寺の末寺を持ち、後世、さらに末寺が加わり、東頸城郡内七か寺、郡外十か寺、合計十七（二十一）か寺の末寺を持つ大本寺となつた。こうして顯聖寺は、通幻派・了庵系の上越地区における最大の教団を形成し、曹洞禪伝播の中心道場となつて現在に至っている。

ところで室町時代開創を伝える現在の了庵系の寺院の一つの特色は、草創以後一時中絶したものを再建・中興した場合が多いことである。宗寿寺（北蒲原郡安田町大字保田三二五二）は、応永五年（一三九八）、玄翁真照の開創であるが、天正年間（一五七三～九二）、曇英慧応の遠孫、英林寺開山乾峰雲貞（一六六四）によつて中興されている。また嘉吉元年（一四四一）開創を伝える廣濟寺（刈羽郡高柳町大字高尾一二五五）は、如仲系の不琢玄珪の草創だが、十六世紀中葉以後、曇英慧応の法系を汲む淨広寺七年開創を伝える東光寺（中魚沼郡中里村倉俣甲一四五二）

の草創は普濟系の長福寺三世笑顔舜葩によつてゐるが、少なくも九世癡兀大道（一一七四五）以後は了庵系に變つてゐる。さらに文安元年（一四四四）開創を伝える香林寺（長岡市雲出町一五二七）は、長尾頼景・為景が開基だが、十六世紀以後、了庵系の洞照寺（長岡市村松町四二〇三）四世章山梵芸によつて中興され、末寺四（三）か寺を持つ小本寺となつてゐる。またこれは了庵系だけに限つたことではないが、その開創年次や開山について問題を残してゐるものも多い。例えば、享徳元年（一四五二）開創を伝える龍雲寺（柏崎市黒滝一五二二）、寛正元年（一四六〇）開創を伝える龍光院（刈羽郡小国町千谷沢四六四）は、いずれも両寺より創立の遅い応仁二年（一四六八）曹洞宗に改宗した朝日寺（前出）の三世龍雲玄珠、九世南嶺全繼がそれぞれ開山となつてゐるなどである。

次に通幻寂靈の法嗣天真自性（一一四一三）の法系の流れを汲む通幻派—天真系の活動も注目すべきであろう。

#### 天真系の活動

前述した如仲天闇開創の来迎寺（前出一四八頁）は、後に通幻派—天真系の超天玖越によつて中興された寺院であつ

た。その超天と同門派の丹波（兵庫県）円通寺（氷上郡氷上町御油九八三、開山は天真自性の法嗣英仲法俊）の五世雷庵性隆（一四二二—九三）は、長祿二年（一四五八）、円通寺より郷里中頸城郡吉川町に帰り、長尾・上杉氏の外護を得て、天台の古刹天林寺を曹洞宗に改宗し転輪寺と寺号を改めた。かくて雷庵は、越後における通幻派—天真系の最初の寺基をきずいたのである。その後、転輪寺は、室町時代、文安二年（一四五五）開創を伝える長泉寺（柏崎市黒滝一七三六）、戦国時代の開創にかかる洞雲寺（柏崎市常盤台五一一、末寺一か寺を持つ小本寺）、東福寺（見附市太田町一七三八）、常安寺（柄尾市谷内一一七一七、末寺五か寺を持つ小本寺）、および後世の開創になる安国寺（熊本市横手町）、法善寺（中頸城郡吉川町）の六か寺の末寺を持つ教団に発展した。

つぎに同じ天真系の越前（福井県）靈泉寺二世華庭籌英は、文明元年（一四六九、一説文明十二年一一四八〇一）、長尾能景の招請によつて、高安寺（上越市寺町三一九一三九）の開山となつた。高安寺はその後、長尾・上杉・松平各氏の外護を得て栄え、後世、末寺三か寺を持つ小本寺と

して成長した。

また常陸（茨城県）金竜寺（竜ヶ崎市若柴町八六六）四世燈芝等忻（一五二八）は、文明六年（一四七四）、招かれて中蒲原郡新関村船越に興隆寺を開創した。その後、五世億山訳寿（一五七二）の時、五泉城主甘糟備後守景継の帰依を受け、永祿五年（一五六二）、寺地を西裏に定め、堂宇を再建して元亀元年（一五七〇）祝國開堂の儀をあげ、寺号を興泉寺（五泉市錦町二一三五）と改めた。これよりさき、三世委岳洞察（一五四一）は、永正六年（一五〇九）、臨濟禪の古刹大輪寺（北蒲原郡中条町東本町一四五六）を曹洞宗に改宗して末寺とした。また六世昌山春林は、天正五年（一五七三）、真言宗安穩寺（北蒲原郡安田町小浮一五七八）を曹洞宗に改宗し、天正年間（一五七三一九一）には、永明寺（五泉市馬下一六二八一一）を開創してそれぞれ末寺とした。かくて興泉寺は、その後も末寺を加え、合計六（四）か寺を持つ小本寺となり、上越地区の転輪寺、高安寺に呼応して、下越地区の通幻派—天真系の中心寺院となつたのである。

ところで以上述べてきた諸寺院は、曹洞宗として開創・

改宗以来、大体一貫して通幻派—天真系の法系を維持して今日に至っているものであるが、次にあげる諸寺院は、全て曹洞宗として開創・改宗しながら、草創時の法系が中絶して、通幻派—天真系によつて再建・中興された寺院である。今、便宜上、曹洞宗に開創・改宗時の年代と当初の派・系を示してみよう。

寺名	開創・改宗年代	當初派・系	本寺
太總寺	応永元	一三九四	大輪寺
来迎寺	"	一三九六	源翁
昌禪寺	"	一三九九	太源・如仲
名立寺	二十六	一四一九	大徹
光源寺	文明十二	一四八〇	太源・如仲
			宝光寺
			名立寺
			興禪寺
			来迎寺

#### その他諸派の動き

以上述べてきた室町時代の越後の曹洞宗教団の歴史は、太源派—傑堂・如仲系、通幻派—普濟・了庵・天真系によつて形成されたと言つてよい。しかしこの間にあつて、実峯（良秀）派：靈雲寺（上越市大字土口一八六）、大徹（宗令）派：陽広寺（東頸城郡松之山町松之山一二〇九）・広徳寺（同郷松代町一九三二）・長命寺（同郷同町松代）、源

翁（心昭）派：山渓寺（東蒲原郡鹿瀬町大字実川）、通幻  
派—石屋（真梁）系：長善寺（北蒲原郡豊浦町大字吉浦）。  
至徳寺（不明）・徳昌寺（三島郡与板町上ノ山六〇二五）、  
太源派—太初（繼覺）系：瑞光寺（新潟市西堀通三一七九  
七）、無底（良韶）派：福樂寺（北蒲原郡加治川村大字向

中条三九二）の扶植と活動もあり、室町期越後の曹洞禪は、  
総持寺教団の峨山韶碩の流れを汲む各派・系によつてまさ  
に百花繚乱の様相を呈していくといえよう。

（未完）